

目指せ住環境のプロフェッショナル

インテリア コーディネーター 講座



未来のために「今」できることを考える!

皆さんは、日々知識の習得に励み、アルバイトや仲間との交流を通じて、「今」しかできない、貴重な経験を重ねていることと思います。

学生時代は、そうした貴重な経験や体験ができる場であると同時に、近い将来、自分が進む道を方向づける場でもあります。

インテリアコーディネーターは、建築・不動産業界での仕事に生きる資格であるだけでなく、資格にチャレンジする過程で得る知識は、実務に就いた時に必ず皆さんの助けとなるでしょう。また、就活に於いて有利な立場に立てることは言うまでもありません。

自分自身の未来のために、学生である「今」できることにチャレンジしませんか。

①就活に役立つ!

皆さんの人間性や個性を面接だけで企業側に伝えることはなかなか難しいですよ。目指す企業に就職するために、企業研究やOB訪問をし、面接準備を進めるのが一般的な就活対策ですが、その他にも**自身の能力や強みを分かりやすく企業側に伝えることができるのが「資格」**です。「資格」はそれ自体が価値のあるものですが、就活において資格は「**目標に向けて努力をし、結果を出した人物**」として評価されます。「住」に関する多くの業界で活かせる資格です。

②知識が生涯の財産に!

建築・住宅・インテリア関連の仕事に従事している方でも、インテリアを基礎からしっかり学んだという方は意外に多くありません。**受験対策を通じて得る知識は、必ず実務で役に立ちます。**しっかりした知識・教養に裏打ちされたスキルは、**生涯を通じて皆さんの大きな財産**となります。比較的時間に余裕のある「今」こそチャレンジに最適なタイミングです。

講座風景



二級建築士エクステンション対策講座

①学習習慣の創出
社会に出た後に養うことが難しいことの1つは、業務時間外の「学習習慣」です。業務に慣れていない入社直後の状態から、いざ「社会人になったから学習を始めよう」と思っても、仕事に意識をとられ上手くいかないことが多いです。この入社までの期間、学校にいる時間外に学習する習慣が身につけば、入社後、業務時間外に学習を行うことも、苦になりません。

②二級建築士取得までの土台づくり
「二級建築士」の取得に必要な時間は、現在700時間とされています。これは、試験に合格している受講生から統計を出したデータです。学部卒の方はご入社して三ヶ月後に受験となります。三ヶ月では学習が間に合わない可能性が高いです。今から学習を始めれば、無理なく学習が出来る、社会人1年目で有資格者となることができます。

二級建築士の独占業務

建築物の設計

建築物の工事監理

建築主に対する重要事項説明

建築士の資格を持っていないとできない「独占業務」というものがあります。設計も工事監理も、お客様に対する重要事項説明も、有資格者のみができる仕事です。建設業界では資格の有無が仕事の幅や今後の活躍に大きく影響します。

実務に活かせる2級建築士

資格取得がこんなに仕事に活きる

最低限のルールを学べた

自分は施工管理の人間なので、どういったプロセスで設計がされているか、以前は具体的にわからない状態でしたが、試験勉強をすることで、最低限のルール等を学ぶことができました。(25歳/ハウスメーカー)

エスキスの手順が効率アップに

設計事務所で働いており、普段の仕事はCADで製図を行っていますが、資格試験のため、手書きの練習を何度も重ねた結果、実際の仕事の計画をするうえでも順序よく考えられるようになりました。仕事の効率もアップしました。(22歳/設計事務所)

プレゼンテーション能力が養われた

建築という仕事は知識だけではなく、プレゼンテーション能力も要求される仕事だと思っています。限られた時間のなかで、要求を満たしながら人を惹きつけるプランを提案する、建築士の学習を通して学んだ力は、仕事でも役に立っています。(27歳/教育、学習支援業)

■2級建築士が扱える (設計・工事監理)建築物

【木造の場合】

- 高さの制限
高さ13mかつ軒高9m以下まで。
- 延べ面積の制限
1階建て…制限無し。
2階建て以上…1,000㎡まで。

【鉄筋コンクリートの場合】

- 高さの制限
高さ13mかつ軒高9m以下まで。
- 延べ面積の制限
階数に関わらず300㎡まで。

※木造も、鉄筋コンクリート造も、建てられる階数に制限はありませんが、高さや軒高の制限から、現実的には3階建て程度が限界です。
※学校、病院、劇場、映画館、公会堂、集合場(オーフィシアム)を有しないものを除く又は百貨店の用途に供する建築物で、延べ面積が500㎡を超えるものは、1級建築士でなければ設計又は工事監理をすることができません。
※その他の構造種別に関する詳細は、試験実施機関のHP、または当学部のHPにてご確認ください。

LIVE講義

専属講師が直接講義!
質問対応・疑問を
その場で解消!

合格を完全サポート!オリジナルテキスト・問題集!



B5判で見やすい法令集
便利なアンダーラインの引き方、
行-インデックス付き!

総合資格学院

すべては「合格」のために

▼講座に関するお問い合わせ
総合資格新宿校 TEL (03) 3340-5671
kogakuin-dousoukai@shikaku.co.jp

お申し込みは、同窓会ホームページ (<http://niche-alumni.com/>) にて簡単に手続きができます。

工学院大学 建築系同窓会主催講座 -2

お申し込みは、同窓会ホームページ (<http://niche-alumni.com/>) にて簡単に手続きができます。

工学院大学 建築系同窓会主催講座 -3



8



10



16



18



20

6 同窓会より

巻頭言 6	NICHE Topics 8	新刊書紹介 10
----------	-------------------	-------------

12 イタリア建築探訪!

辰野金吾のグランドツアー 12	JOE COLOMBO 1952-1971 鈴木 敏彦 18	永遠の都ローマ 中島 智章 20
--------------------	-----------------------------------	---------------------

26 NICHE PASSPORT

建築・都市・観光が共存する国スペイン 阿部 百合子 28	カラダで学ぶ2カ国の建築と都市 櫻本 敦士 30	ロンドンの構造美をめぐる 荒井 雄大 32
アメリカの空間構造と高層建築 伊藤 賢治 34	アドルフ・ロースとベルリンの建築を求めて 谷口 翔太 36	オランダの国土開発とその使い方を学ぶ 山本 真央 38

40 NICHE LETTER

梓設計の構造を支える工学院大学の卒業生 40	望月大介研究室 40代卒業生たちの現在 浦 俊弥 44
---------------------------	--------------------------------

46 白樺湖夏の家

歳時記 2017 鈴木 敏彦 48	活動報告 2017 鈴木 敏彦 50	外構整備計画案 2018 波多江 宏 52
----------------------	-----------------------	--------------------------

NICHEとダイジェスト

2014年より、工学院大学建築学部同窓会誌NICHEは2冊に分かれました。一つは建築とデザインの学際的な架け橋として、海外取材に基づく特集記事と連載を中心とした叢書『NICHE』です。同窓会費や寄付金をお支払頂いた方にお送りするほか、全国主要書店やアマゾンで販売しています。もう一つは広報誌『NICHEダイジェスト』です。『NICHE』から抜粋した内容と本学に特化した記事を掲載し、同窓生や本学関係者に無料で配布します。



24



31



38



40



48



52



6月15日発売予定
(内容、発売日は変更になる場合があります)

NICHE 05

イタリア建築探訪!
1 辰野金吾のグランドツアー
2 JOE COLOMBO 1952-1971
3 永遠の都ローマ
2018年6月15日第1刷発行
280ページ永久保存版
特集160ページ、日伊バイリンガル
定価: 本体2,400円+税

イタリア建築探訪!

1 辰野金吾のグランドツアー 1882 - 1883

鼎談 辰野金吾のグランドツアー 清水重敦×河上眞理×藤森照信
コラム1-1 古市公威『ヨーロッパの公共事業についての覚書』にみるイタリア
明治の世界一周～岩倉使節団と『米欧回覧実記』～
コラム1-2 観光ガイドブックとしての米欧回覧実記
コラム1-3 明治人の見たイタリア鉄道
- ナポリ・ピエトラルサ国立鉄道博物館の蒸気機関車コレクション -

2 JOE COLOMBO 1952-1971

イニャーツィア・ファバタさんとジョエ・コロombo
ジョエ・コロombo 1952-1971
スペースジェネレーター
ジョエ・コロomboと建築家具
コラム2 60年代ラジカリズムとジョエ・コロombo

3 永遠の都ローマ

ローマ・バロック建築 24景
ローマのモダニズム
リノベーションの原点 古代ローマの使い回し
コラム3-1 ローマの新旧デザイン 石棺の噴水の転用、ブルガリのモチーフ
コラム3-2 ローマ建築デザイン事情

巻頭言

2018 vol.41



ジェノヴァ・ピアッツァ・プリンチペ駅
1882年10月、辰野はフランスの旅を終え船でジェノヴァに到着した。
そしてジェノヴァの駅からローマを目指すイタリア鉄道の旅に出た。



ミラノのスタジオ・ジョエ・コロomboにてインタビュー。
左端がコロomboの生き証人であるイニャーツィア・ファヴァタさん。
右端がコロomboのアーカイブを整理したエリザベッタ・ボルガッティさん。
左中央の本学卒業生でトリノ在住の橋本しのぶさんが通訳を務めた。



パチカンのサン・ピエトロ大聖堂のクーポラから楕円形の広場を臨む。
らせん階段を登ると、120メートルの高さから眼下を一望できる。
広場は、ローマのバロック建築を彩る巨匠、ベルニーニの設計。

海外への好奇心と、学びを還元する力

NICHE 出版会では2014年から「大学の知的資源やネットワークを生かして社会に貢献する」という理念を掲げ、大学関係に配布するダイジェスト版と、広く一般に発信する叢書の2本立てにシフトして今年で5年目を迎えた。前者では同窓生の仕事ぶりや、海外渡航奨励金制度を用いて海外を巡った在学生のレポートを載せ、後者では毎回異なる国をテーマに掲げ、海外の建築探訪を通じてその国の建築と歴史を掘り下げる特集を組んできた。世界は目まぐるしく動いているが、建築とデザインと教育事情には常に通底するものがある。それは海外に対する飽くなき好奇心と、見聞きしたものを還元しようとする力である。本学を創設した渡邊洪基はかつて駐オーストリア日本大使として働き、古市公威は初の文部省フランス留学生としてパリに学んだ。辰野金吾は1880年から2年間イギリスに学び、最後の1年をロンドンからイタリアのローマをめざす建築視察の旅で見聞を広めた。そこで、NICHE編集部では5か国目の取材対象にイタリアを選んだ。

特集1 辰野金吾のグランドツアー

2012年の東京駅の保存と復原を機に、

建築家の辰野金吾に注目が集まっている。辰野は工部大学校（東京大学）にてジョサイア・コンドルに建築を学び、イギリス留学とフランスからイタリアに向かう長期旅行において西洋建築に触れた。当時、グランドツアーと呼ばれたイタリアの視察旅行において辰野が得たものは実に豊かであったに違いない。帰国後に辰野は工手学校（工学院大学）の創立に参画し、その後赤レンガの銀行建築を数多く手がけた。辰野はイタリアで何を見たのか。「辰野金吾のグランドツアー」と題し、建築史と美術史の研究者の鼎談を収録した。

振り返れば辰野の旅より10年早く、1873年に渡邊洪基が一員であった岩倉使節団がイタリア入りしている。渡邊が岩倉使節団にいたのは米国訪問までであったが、1874年に駐オーストリア公使としてイタリアを訪れている。また、古市公威も辰野の旅の6年後、1889年に山縣有朋の随員としてフランス、イタリアを巡っている。1870年のイタリアでは、全国を巡る鉄道網が整備されつつあった。やがて関西鉄道と両毛鉄道の社長を務めた渡邊、東京駅を建設した辰野、日本と韓国の鉄道の長官を務めた古市にとって、イタリアでの鉄道の旅は産業革命の進展を実感する体験となったに

違いない。

特集では、渡邊、辰野、古市の3人の視察内容を当時のイタリア鉄道路線図と重ねて紹介する。NICHE編集部は、辰野のイタリア視察ルートを列車で追体験した。発着が遅れたり、列車が振り替えられたり、席を予約した号車が存在しなかったりしたが、それもイタリア鉄道の今も変わらぬ事情であるかもしれない。

特集2 ジョエ・コロombo 1952-1971

ジョエ・コロomboをご存じだろうか。1960年代のイタリアのデザイン界を席卷した天才的デザイナーだ。先駆的なシステム家具や場を生み出す家具を作っていた。しかし若くして亡くなったためか、その名はあまり知られていない。彼が作ったのは単なる家具ではなく、人間を内包する場を生み出す空間性の高いシステム家具だった。

NICHE編集部とジョエ・コロomboとの提携は2015年に遡る。私たちはミラノにあるスタジオ・ジョエ・コロomboを訪ね、ジョエ・コロomboをNICHEで紹介したいと願い出た。対応してくれた建築家のイニャーツィア・ファヴァタ氏こそすべての作品の権利を引き継ぎ、膨大な資料を47年間に渡って維持管理してきたキーパーソンであった。それから2

年の交渉を経て、ついにイタリアを特集する本号『NICHE 05』での掲載が決まった。NICHE編集部では恒例の墓参りに出かけ、ミラノの墓地にてジョエ・コロomboに本書の編集に全力を尽くすことを誓った。『NICHE 05』では、ファヴァタ氏のインタビューと、ジョエ・コロomboの作品の中でも特に空間性の高い69作品を厳選しオールカラー160ページで紹介する。これだけたくさんのジョエ・コロomboの作品を日本語で出版するのは本邦初である。彼の豊かな発想に再び光を当てることができ、嬉しく思う。

特集3 永遠の都ローマ

「全ての道はローマに通ず」と言う。芸術や建築を志す者は必ずローマに足を運び、旅に出ずともローマは私たちの憧れをかきたてる。ヨーロッパ各地に建築の見どころは存在するが、ローマが観光地として名高い理由は、歴史的に比類なき高度な文明の中心地であり、パチカンが傍に存在するからだ。

夏の間、NICHE編集部はナヴォーナ広場とファルネーゼ宮の間にある6世紀の貴族の館に取材の拠点を据え、毎日、歴史的建築に足を伸ばした。「ローマのバロック建築24景」と題し、西洋建築史を専門とする中島智章先生が選りすぐりの

建築とディテールを解説している。書籍の『NICHE 05』には中島先生が自ら撮り下ろした写真をたっぷり掲載した。天候には恵まれたが炎天下の移動および写真撮影は非常に過酷で、でこぼこの石畳を歩き続けるには休憩と水分補給が欠かせなかった。それでも人はローマを目指す。そこが永遠の都であるからだ。フォロ・ロマーノ、コロッセオ、カラカラ浴場を巡り、すぐ横に古代ローマが息づくことに驚かされた。そしてムッソリーニが拓いたエウル地区に足を伸ばし、1930年代の人々が描いた新都市を体感した。ローマは広い、そして深い。本章がローマの温故知新となれば幸いである。

大学という学び舎は知的資源の宝庫である。そして言語と国境を越えた人的ネットワークこそ、未来への力を育む。NICHE編集部では、皆様からの忌憚のないご意見とご感想を励みに、ニッチな視点で世界を切り拓いていきたい。

2018年2月 東京にて
NICHE 編集長
建築学科同窓会会長 鈴木敏彦



鈴木敏彦 Toshihiko Suzuki

建築家・デザイナー

1958年東京生まれ。工学院大学建築学科修士課程修了。黒川紀章建築都市設計事務所、フランス新都市開発公社EPAmarne、早稲田大学建築学専攻博士課程を経て、1999-2007年東北芸術工科大学プロダクトデザイン学科助教授、2007-2010年首都大学東京システムデザイン学部准教授、2010-2011年工学院大学工学部建築都市デザイン学科教授。2011年より工学院大学建築学部建築学科教授。

北欧建築・デザイン協会副会長。

グッドデザイン賞/中小企業庁長官賞、アジアデザイン大賞グランプリ、レクサスデザインアワード2013、iFデザインアワード2014、第19回木材活用コンクール林野庁長官賞、A'Design Award2016銀賞他受賞多数。

著書に『世界で一番美しい建築デザインの教科書』（エクスナレッジ）、『北欧の巨匠に学ぶ図法 家具・インテリア・建築のデザイン基礎』（彰国社）、『北欧の巨匠に学ぶデザインアスブルンド/アールト/ヤコブセン』（彰国社）、『建築プロダクトデザイン/暮らしを劇的に変えるモノと空間の設計思想』（講談社）、『ヤコブセンの建築とデザイン』（TOTO出版）、『プロセスでわかる住宅の設計・施工』（彰国社）などがある。

NICHE Topics

2017年度の話題

1 卒業生の受賞

◆ 2016年建築学会奨励賞 2016年木質構造研究会 (大熊幹章賞)

神戸 渡

(2001年工学院大学卒業、関東学院大学専任講師)

『軸材として厚物合板の耐圧縮性能に関する実験的研究』

細長比の異なる厚物合板の圧縮試験を実施し、座屈応力度を求める方法を検討した。細長比が部材のひずみと変形、破壊性状等に及ぼす影響を調べ、座屈応力度の評価法にて建築学会奨励賞を受賞した。

『木質構造における座屈・割裂等を考慮した実験および解析』

合板やLVLなど木質材料の圧縮実験から座屈強度の理論を実証した。木質材料の使用基準の大幅な見直しを実証し、木質材料・木質構造技術研究基金賞を受賞した。



同賞を受賞された関東学院大学専任講師神戸渡講師(左)、大熊幹章東京大学名誉教授(中)、国土交通省国土技術政策総合研究所中川貴文氏(右)。

◆ 2017年建築学会奨励賞

鈴木 賢人

(2010年工学院大学(宮澤研)卒業、東京理科大学助教)

『立体偏心を有する2層1軸偏心木質架構の揺れ応答に関する実験研究』

偏心による揺れ振動が原因で木質住宅が損傷、倒壊することがある。2層木質架構の振動台実験を行い、上偏心の有無により各層重心位置の応答変位が変化することを確認した。

◆ 2016年ウッドデザイン賞

小原 勝彦

(2001年工学院大学博士(工学)、岐阜県立森林文化アカデミー准教授)

『自力建設プロジェクト』

林野庁補助事業のウッドデザイン賞コミュニケーション部門にて、岐阜県立森林文化アカデミーの教育研修システムが受賞した。学生が職人の指導のもと学内の木材を使用し協働するプロジェクトである。



◆ 第43回東京建築賞 奨励賞一般一類部門

鈴木 敏彦

(工学院大学建築学部教授)

『みやむら動物病院』

東京都江戸川区で人気の動物病院を、鈴木敏彦先生とビルディングランドスケープの西澤高男氏の設計で移転増床した。LVL木層ウォールを用いた準不燃都市木造建築である。構造壁積層面を待合室側では現しで用い、屋外側では、撥水加工を施した壁柱で仕上げるなど、場所や部位に応じて構造材、仕上げ材としてLVLを駆使したことが評価された。日本建築学会『作品選集2018年』に掲載された。



2 一級建築士合格者 大学別ランキングで 6位

国土交通省から、2017年度一級建築士試験「設計製図の試験」の合格者が発表された。本学出身の合格者は60人。学校別合格者では全国6位。昨年度から一つランクアップした。

平成29年一級建築士合格者上位大学

1位 日本大学 181名	6位 工学院大学 60名
2位 東京理科大学 108名	6位 千葉大学 60名
3位 芝浦工業大学 102名	8位 近畿大学 58名
4位 早稲田大学 81名	8位 法政大学 58名
5位 明治大学 67名	10位 京都大学 56名

出典：財団法人建築技術教育普及センター

平成29年一級建築士試験「設計製図の試験」の学校別合格者数一覧

3 「白樺湖夏の家」 での活動

「白樺湖夏の家」では様々な活動を実施している。2017年9月17日に、ご家族の敦子夫人と武藤かおり先生が中心となり、武藤研OBおよび建築を保存する会の会員が集まり「武藤章33回忌の集い」が和やかに行われた。また、9月30日には『北欧建築デザインの集い』では平山達先生(多摩美術大学名誉教授)のアールトに関する講演会が催された。詳細は特集ページで報告する。

4 川崎民家園 + 合同同窓会

名誉教授の宮澤健二先生が耐震評定で関係している川崎市立日本民家園の免震補強の現場見学会を2017年3月25日に開催した。これを機に宮澤研究室と望月旬研究室との合同同窓会を10月14日に開催した。トロハ、サーリネン、モーメント図の話に花を咲かせ、同窓生の受賞を祝い今後の活躍を祈念した。



5 訃報 澤崎宏氏

澤崎宏氏(1981年工学院大学工学部建築学科卒業、株式会社計画・環境建築代表)が2018年1月29日に60歳にて永眠した。澤崎氏は山下司研究室を卒業後、つくば科学万博、山陰・夢みなと博覧会、愛・地球博など数々の博覧会プロデュース事業を手掛けた。また、東京都建築士事務所協会千代田支部長として、会誌「日事連」編集専門委員会委員長を務めた。工学院大学では評議員、校友会副会長、建築系同窓会会長、建築学部の非常勤講師として母校に尽力し、建築を保存する会やNICHE編集部にて共に書籍を出版した。3月13日に京王プラザホテル新宿にてしめやかに「送る会」が執り行われた。建築系同窓会一同、心よりご冥福をお祈りする。



6 黄綬褒章を受賞 増山英樹氏

増山英樹氏(1974年工学院大学工学部建築学科卒業、ゲンプラン設計代表)が平成29年春の褒章にて黄綬褒章の栄誉を受けられた。黄綬褒章はその道一筋に精励し衆民の模範となる者に与えられる。2017年5月16日、増山氏は国土交通省にて伝達式典に参加し、皇居にて皇太子殿下に拝謁した。そして今の気持を「鹿児島県建築士事務所協会および裁判所や弁護士会において、長年にわたり建築にかかわる相談事を受けてきた事が評価された」と受け止めている。今後とも、真摯な気持ちを忘れずに日々精進しながら業務に取り組んで参りたい」と語る。



新刊書紹介

同窓生や建築学部の教員など関係者が執筆した新刊書の一部を紹介する。

建築めいろ

せかいのすこいたても!



なすみそいため(イラスト)、高瀬ひろし(著)、中島智章(監修)

エクスナレッジ
31ページ
1,500円+税
2016年9月2日

ロシア博覧センターの逆さまの家、ドイツのマクシミリアン公園にあるガラスの象の建物、パリ郊外のムニエのチョコレート工場など一風変わった建築と、背景の雲や森を一統きの迷路に見立てた子供向けの本。本来は立体である建築の外観や内観を、平面の迷路としてなぞるには柔軟な心が必要だ。不思議な建築と迷路とクイズを楽しめる本書は、好奇心旺盛な子供に最適だ。

世界一の豪華建築バロック



中島智章(著)

エクスナレッジ
144ページ
1,800円+税
2017年7月26日

トレヴィの泉やヴェルサイユ宮殿からキューバの教会堂まで、豪華絢爛なバロック建築の旅に読者を誘うオールカラーの写真集。16世紀末にローマで生まれ19世紀まで発展した壮麗で豊かな装飾の見どころを、ルネサンスとの比較やオーダーの用語の解説を交えて中島先生が解説する。贅を尽くした大聖堂や宮殿建築の空間の数々を、この価格で所有できるのは実に贅沢ではなからうか。

私鉄郊外の誕生



片木篤(編集)、土屋和男、他(執筆)

柏書房
294ページ
3,400円+税
2017年8月25日

東京、名古屋、大阪に広がる私鉄の成り立ちを、建築史、環境、都市計画の専門家たちがひもといた。国鉄が都市を整備したのに対し、私鉄は鉄道、電力、不動産会社を母体として郊外に田園都市、学園都市、高級住宅地、海浜リゾートを作り出した。1900年代に膨張した郊外の記録は、人口増加と共に膨らんだ夢と希望の歴史に他ならない。私鉄郊外の誕生と成長を丁寧に記している。

Kogakuin University School of Architecture

YEARBOOK 2015

工学院大学建築学部活動報告



工学院大学建築学部

フリックスタジオ
200ページ
1,800円+税
2016年5月1日

工学院大学にて建築系3学科から日本初の建築学部になり出版する2冊目のイヤーブック。ランドスケープとまちづくりから家具とインテリアまで、卒業制作と論文、設計課目の授業の優秀作品を通じて包括的に紹介する。選ばれし作品のパネルや模型やスケッチからは学生の秀逸な視点とディティールを描く力が、そして担当教員の総評から建築に向き合う真摯な姿勢が伝わってくる。

Kogakuin University School of Architecture

YEARBOOK 2016

工学院大学建築学部活動報告



工学院大学建築学部

フリックスタジオ
200ページ
1,800円+税
2017年5月1日

「私たちの思考プロセスは、常にトライ&エラーの繰り返し、積み重ね」だと巻頭に野澤康先生は記す。この本に結実した成果も「そうした日々のトライ&エラーの繰り返しとそれに必要な学習・情報収集がうまく結実し、高い評価を得たもの」なのだ。イギリス・カンタベリーで実施中のハイブリッド留学、本年から始めたヴェネチアの大学院交換留学の様子も合わせて総括している。

NICHE 04

ドイツ建築探訪!



工学院大学建築学部同窓会
NICHE出版会

丸善出版
282ページ
2,400円+税
2017年8月14日

ドイツの建築とデザインは、20世紀の日本に強く影響を及ぼした。建築家のブルーノ・タウトは3年間の日本滞在中に工芸指導に関わった。建築とデザインと教育の代名詞となったバウハウスは、ヴェルクブントを継承したタウトの思想を意識していた。そしてベルリンに留学した妻木頼黄と森鷗外は日本にドイツの思想を持ち帰っている。総力取材でニッチに掘り下げた永久保存版。

台湾原住民族の生活再建と地域活性化

国民的財産としての農村文化と地域資源の継承発展そして日本が学ぶこと



東正則(著)、林梓聯(著)

農林統計出版
280ページ
3,000円+税
2017年8月31日

これまでも環境共生都市における農業の重要性を説いてきた東先生が、30年以上の親交がある林梓聯先生を共著者に迎え、自ら中国語を翻訳しながら台湾原住民族をめぐる問題を論じた。台湾には2014年時点で人口の2%にあたる54万人、14族の原住民族がいる。多様な文化を尊重し、歴史的的位置付を振り返り、農山村の生活再建を検討することはひいては日本の農村の活性化に役立つ。

インテリアの百科事典



日本インテリア学会(編集)、直井英雄、上野義雪、金子裕行、白石光昭、松本吉彦、鈴木敏彦、他(執筆)

丸善出版
530ページ
22,000円+税
2016年5月30日

何でもネットで調べられる時代に丸善出版はあえて百科事典を刊行している。日本の各分野の第一人者が執筆した章を読む行為は、オムニバスの授業を受けるに等しい。インテリアのデザイン、構造、設備、材料、人間工学、歴史、経済、法律の幅広い内容を日本インテリア学会が編集し70名が執筆した。設計、実務、法規、販売の視点から、住宅、オフィス、公共商業空間を学ぶ。

建築 未来への遺産



鈴木博之(著)、伊藤毅(編集)、中島智章(解説)、他

東京大学出版会
420ページ
3,800円+税
2017年6月26日

2014年に68歳で逝去した建築史家の鈴木博之先生は膨大な著作を遺した。中島智章先生を含め鈴木研究室のOBがそれを分類し編纂して一部を本書にまとめた。「近代とは何か」「装飾が死んだ」といった問いかけと、各時代を映す建築批評クニクルが、今なお知の巨人の偉大さと不在を浮き彫りにする。藤森照信先生や、著名な建築家が章ごとに添えた短い解説文が行間を補完している。

ポーター

境界線から考える都市と建築



三宅理一(監修)、「境界線から考える都市と建築」制作実行委員会(編)、香川浩、土屋和男、他(執筆)

鹿島出版会
432ページ
2,500円+税
2017年8月15日

三宅理一先生がこれまでに教鞭をとった芝浦工業大学、リエージュ大学、慶應義塾大学、パリ国立工芸院、藤女子大学の教え子が執筆を分担したアンソロジー。ベルギーやモルドヴァの宗教空間、イスラエルやエチオピアの文化遺産、東アフリカの実態、スイスや仙台の復興支援、朝鮮やモロッコの都市形成といった研究内容から、三宅研究室に通底するグローバルな視点を感じられる。

北欧文化事典



北欧文化協会、バルト=スカンディナヴィア研究会、北欧建築・デザイン協会、鈴木敏彦、他(執筆)

丸善出版
657ページ
20,000円+税
2017年10月25日

アイスランド、ノルウェー、スウェーデン、フィンランド、デンマークの歴史と文化と生活を、北欧を研究する3団体(北欧文化協会、バルト=スカンディナヴィア研究会、北欧建築デザイン協会)の研究者が包括的に執筆した。写真が白黒であることや、調べたい用語を目次か索引で探す手間を差し引いても、充実した内容はインターネットの情報に勝る。これを読めば北欧通だ。

1 辰野金吾のグランドツアー 1882 - 1883

本章では、辰野金吾のイタリア旅行ルートを中心に、渡邊洪基が一員だった岩倉使節団や、古市公威が同行した山縣有朋のヨーロッパ視察ルートと当時の鉄道網を重ね合わせ、19世紀末のイタリアを重層的に紹介する。辰野と渡邊と古市は1887年に工手学校（後の工学院大学）設立に携わったキーパーソンだ。

辰野金吾は工部大学校（東京大学工学部の前身）の一期生として建築を学び、1879年に首席卒業生に与えられる3年間の官費留学を勝ち取った。1880年から2年間、ロンドン大学及びロイヤル・アカデミー・オブ・アーツに学び、さらに1年間をフランスとイタリアで建築視察の旅に費やし、1883年に帰国した。辰野は帝国大学工科大学と名を変えた母校の教授となった。そして帝国大学初代総長の渡邊洪基と、工科大学初代学長の古市公威らと共に1887年に工手学校を設立し、若手エンジニアの養成に尽力した。3人はほぼ同時期にイタリアやフランスを巡り、学校教育に、ひいては日本文化に視察の成果を還元した。

話を辰野の留学時代に戻そう。18世紀のイギリスでは貴族の子息を国際人に養成するためにフランスやイタリアへ長期間遊学させる旅をグランドツアーと呼んだ。辰野の旅はグランドツアーそのものであった。詳細は『辰野金吾』（清水重敦・河上真理著、ミネルヴァ書房）に詳しい。それによるとまず彼は1882年5月にロンドンを発ちフランスのパリに向かった。パリには2ヶ月近く滞り、ルーブル美術館やエコール・デ・ボザールに足繁く通った。その後ヴェルサイユ、フォンテーヌブロー、オルレアン、シャルトル、プロワ、アンボワーズ、ルーアン、アミアン、ランスからパリに戻り、ニースを経て10月にイタリアのジェノヴァに入る。そして辰野は、ミラノ、パヴィーア、ヴェローナ、ヴェネツィア、フィレンツェ、ピサ、シエナを経てローマに到着する。5ヶ月間をかけて巡ったイタリアのルートを、1870年のイタリア鉄道路線図に重ね合わせると、辰野は移動に鉄道を利用したことがわかる。同様に、1873年には、岩倉使節団が鉄道でフィレンツェ、ローマ、ナポリ、ヴェネツィアを23日間で巡っている。やがて古市公威も1889年にイタリアに来て、ローマからフェラーラに向かい治水工事を視察した。今と違い、海外視察とは後の国家戦略の判断材料となる大いなる知見を得る時代であった。当時のグランドツアーの醍醐味を順にひもといてみよう。



辰野金吾 1854 - 1919
Kingo Tatsuno

日本初のプロフェッサー・アーキテクト。英国留学後、教鞭を執る一方で、建築事務所を東京と大阪に構えた。建築学会会長。ライバルの妻木頼黄とは帝国議会議事堂の設計をコンペにするか否かで争い、古市に仲裁してもらった。代表作は中央停車場（東京駅）と日本銀行本店。大の相撲好き。



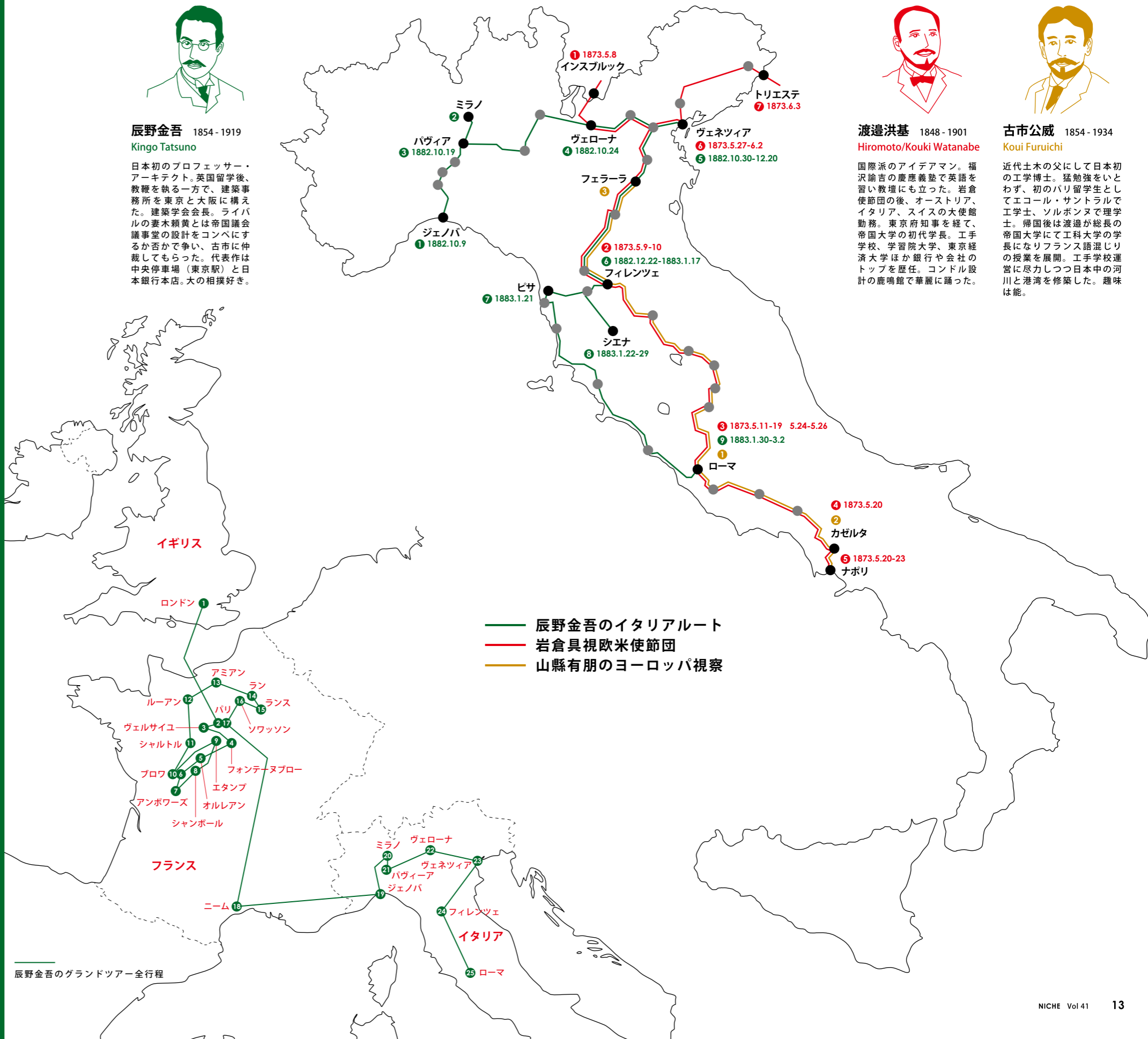
渡邊洪基 1848 - 1901
Hiromoto/Kouki Watanabe

国際派のアイデアマン。福沢諭吉の慶應義塾で英語を習い教壇にも立った。岩倉使節団の後、オーストリア、イタリア、スイスの大使館勤務。東京府知事を経て、帝国大学の初代学長。工手学校、学習院大学、東京経済大学ほか銀行や会社のトップを歴任。コンドル設計の鹿鳴館で華麗に踊った。



古市公威 1854 - 1934
Kouji Furuichi

近代土木の父にして日本初の工学博士。猛勉強をいとわず、初のパリ留学生としてエコール・セントラルで工学士、ソルボンヌで理学士。帰国後は渡邊が総長の帝国大学にて工科大学の学長になりフランス語混じりの授業を展開。工手学校運営に尽力しつつ日本中の河川と港湾を修築した。趣味は能。



辰野金吾のグランドツアー全行程

鼎談 辰野金吾のグランドツアー 清水重敦×河上眞理×藤森照信

日本の近代建築の礎を築いた辰野金吾について、河上眞理先生と清水重敦先生は多くの書籍や論文を共著で上梓している。また、藤森照信先生は辰野を含めた日本の近代建築事情を研究し多くの著作を発表している。NICHE

(聞き手：NICHE編集部 鈴木敏彦、中島智章、香川浩、杉原有紀)

編集部ではイタリアを周遊し、今回の鼎談を企画した。2018年2月24日に藤森先生のご自宅であるタンポポハウスで収録したインタビューの全文を『NICHE 05』に、本誌にはそのダイジェストを掲載する。



タンポポハウスにて、左から清水重敦先生、河上眞理先生、藤森照信先生

鈴木 NICHEでは毎年ひとつの国を選び、工手学校に縁のある人物をまとめています。本日は辰野金吾とグランドツアーについて伺います。

藤森 では最初に、辰野金吾が工部大学校で首席になって出かけたグランドツアーを説明しましょう。建築界ではルネサンスが習熟してヨーロッパ中に広がると、優秀な学生はローマに行って本物の古代ローマを見てくのが卒業試験のように大事になり、金持ちの師弟はもちろん、一番優秀な師弟は奨学金をもらって行く習慣がありました。日本で言うと奈良や京都に行くようなものだよ。

清水 辰野金吾はまずイギリスに向かいました。ロンドンにおいてウィリアム・パージェスの建築事務所で実際に建築を学ぶ一方、ロンドン大学で理論を学びます。1882年3月にロンドン大学建築課程に加えて美術課程2等も修了して2年間のイギリス留学生生活を終えます。そして1年間をかけてフランスとイタリアを游学した後に帰国します。どちらかというといギリスの影響が大きく、パージェスの影響でフランスにも行っていますが、辰野にとってイタリアでの経験にどんな意味があったのかは余り語られていません。

河上 このグランドツアーには、国から

費用がまかなわれました。主席卒業者が選ばれたので、もちろん辰野は優秀だったわけです。

藤森 いやジョサイア・コンドルが設計の点数なんかは上乘せしたと思うよ。工部大学校に補欠で入り、建築に5人いるうち宮伝次郎というのが死んで、辰野が追加募集で官費入学生に合格した。補欠と正規はお金の額が違います。全寮制の正規生は給費制で全額工部省持ちですから。辰野は勉強ができなかったから、努力した。息子の辰野隆はお父さんから「とにかく勉強ができなくて頭が悪いから、人が1やっていたら2やれ」と聞かされ厳しい教育を受けたの。同期生が書いているけれど、寮生活の同室の学生が散歩に行くと町でのんびりして帰ると辰野が勉強していて嫌な感じになったと。そういう意味では辰野はすごく嫌われていたの。

清水 工部大学校の初代4人のうち、辰野と片山東熊が一等で卒業。曾禰達蔵と佐立七次郎は二等。実は工学士の学位がもらえるのは一等だけで、二等は2年後の学位特別試験を経ないと工学士になれませんでした。

藤森 それは切ないね。私が思ったのは、コンドルが工部学校校の建築を誰に託すか、という時に辰野以外いなかったのです。とにかく真面目な人なので、留学か

ら帰ってくると、帝国大学工科大学（東京大学）の造家（建築）学科を作り、その後、工手学校（工学院大学）の造家（建築）学科を作ったのですから。

清水 辰野の野帳を一生懸命に見ていたらわかったのですが、ロンドンではAA（英国建築協会）の見学会に辰野が参加していました。グランドツアーというモニュメントを巡るのかと思うけれど、AAの見学会では最新建築をめぐり、情報をいっぱい吸収しています。

河上 1881年に描いたと考えられるホーレス・ジョーンズ設計の中央青果市場のスケッチがあります。これは1883年竣工するので、施工中の現場をAAの見学会で訪れたということなのでしょう。藤森 辰野としては自分の国に無いものを見て取り入れないといけないから、そこがヨーロッパの人のグランドツアーと違うところだね。

清水 でもフランスで見ているのはほとんどゴシック教会ですね。パージェス先生がフランスゴシックを何度も見ている。

藤森 辰野はフランスに新しいものは認めていないのかな。

河上 辰野はパリからヴェルサイユに行っている他、フランスでは古典様式による宮殿建築を多数スケッチしています。

河上 イタリアでの最初のスケッチは

ジェノヴァの船着き場のすぐ横のパラッツォ・ドーリアの時計塔です。そして出来て間もない近代的な共同墓地であるカンポサントを見学しています。辰野の「滞欧野帳」の中でお墓を見た経験はここだけですね。

清水 カンポサントは配置に合理的な面はありますが、ロンドンで見た最新の鉄骨などの近代建築とは違い、様式建築です。その中で最新の彫刻家が仕事をした装飾たっぷりのお墓です。

河上 ここには近現代イタリア彫刻を代表する彫刻家による墓碑彫刻が多数あります。ジュリオ・モンテヴェルデがフランチェスコ・オネトの委嘱によって制作した天使の像はその代表です。辰野金吾はドームを頂いたお堂を見て、「パンテオンの写し」と記しています。次に行ったミラノの記述は1ページしかありません。パヴィーアではカルトゥジオ会修道院に行って、スケッチを5枚描いています。

清水 辰野は尖塔も描いています。上に飛び出すものをどうデザインするか考えていたのでは。

藤森 そこが画家と辰野との違いですよ。写真代わりに描いた。国に帰ったらもう一度思い出して建てなくてははいけなから。

河上 ヴェローナではパラッツォ・グス

タヴェルツァという建物一つと、アレーナの一部を描いています。

鈴木 辰野はコーニスばかり描いたというので、ヴェローナに行って、広場に面した建物の中からコーニスが特徴的な建物はこれだ、と思って訪ねた建物がパラッツォ・グスタヴェルツァでした。1階のヴィットリオ・エマヌエレというレストランで尋ねたら「そんな名前は知らない」と言われましたが、ウェイターのチーフに聞いたらメニューに印刷した1895年開業の写真を見せてくれて、辰野が描いた建物だと確信しました。

藤森 コーニスを作るのは難しいと思ったのかなあ。

鈴木 ヴェローナのドゥエートーリホテルは当時の有名な宿で、グランドツアーでゲータが泊まった場所です。辰野も泊まった可能性があるのではと思っオーナーに訪ねたのですが、宿帳がもう残っていませんでした。次はいよいよヴェネツィアです。

藤森 ジョサイア・コンドルがヴェネツィアン・ゴシックを意識して日銀の前身の開拓使物産売捌所を設計した際に、学生時代の辰野はゴシックの一部を担当しました。授業の一環でディテールを書いていますから、当然辰野はコンドルからヴェネツィアン・ゴシックを聞いたは



『辰野金吾』河上眞理、清水重敦著、ミネルヴァ書房



『辰野金吾 滞欧野帳』(明治14-15年/辰野家蔵)

清水重敦 Shigeatsu Shimizu

1971年東京都生まれ。建築史家。東京大学大学院工学系研究科博士課程単位取得退学。現在、京都工芸繊維大学教授、博士(工学)。主著に『建築保存概念の生成史』中央公論美術出版(日本建築学会賞(論文)、建築史学会賞、日本イコモス奨励賞)、『擬洋風建築』至文堂など。

河上眞理 Mari Kawakami

1963年千葉県生まれ。美術史家。ヴェネツィア・カ・フォスカリ大学大学院博士課程修了。現在、京都造形芸術大学准教授、Ph.D。主著に『工部美術学校の研究—イタリア王国の美術外交と日本』中央公論美術出版。清水重敦との共著に『辰野金吾』佐賀城本丸歴史館、『辰野金吾 美術は建築に応用されざるべからず』ミネルヴァ書房(日本建築学会著作賞)など。

藤森照信 Terunobu Fujimori

1946年長野県生まれ。建築家、建築史家。東北大学建築学科卒業後、東京大学大学院博士課程修了。東京大学生産技術研究所教授、工学院大学教授を経て、現在は、東京大学名誉教授、工学院大学特任教授、江戸東京博物館館長。専門分野は建築史、45才より設計を始め今に至る。近作に、『多治見市モザイクタイルミュージアム』『草屋根』『銅屋根』(近江八幡市、たねや総合販売場・本社屋)、史料館、美術館、住宅、茶室など建築作品多数。『磯崎新と藤森照信の茶席建築談義』六耀社、『藤森先生茶室指南』彰国社など、建築史、建築探偵、建築設計活動に関する著書多数。

GENOVA 1882.10.09



ジェノヴァ・ピアッツァ・プリンチベ駅
1882年10月、辰野は5ヶ月のフランスの旅を終えイタリア入りし、この駅からローマをめざした。NICHEの旅もここから同じルートを追体験した。

ずです。もう一つ大事なものは、辰野の生涯のパトロンは渋沢栄一で、ヴェネツィア好きの変な人ですから、それでおそらくヴェネツィアは重要だと思ったのではないのでしょうか。

河上 ヴェネツィアでは長沼守敬^{もりよし}という彫刻家が勉強していました。

ヴェネツィアにはアジアとの交流のためアジア関係の言語を教える語学学校が作られ、その中で日本語学校が出来ました。ヴェネツィア・カ・フォスカリ大学の前身です。長沼はそこで日本語を教える一方で、現地の美術学校で彫刻家を志して勉強していたわけです。そこに辰野がお世話になる。

河上 長沼の元には辰野との手紙があります。辰野はサンマルコ大聖堂と総督宮を見えています。

香川 帝国大学の総長を務めた渡邊洪基が参加していた岩倉使節団は、写真技師がいなくて、当時見つけた写真を持ち帰って、日本の版画家がそれを銅版画集にしました。辰野もそういうものを見たかもしれません。渡邊は、後のオーストリア大使時代にヴェネツィアに行き、岩倉使節団の報告書に書かれていた天正少年使節団の碑文を見えています。

河上 辰野はヴェネツィアを拠点にパドヴァや近郊の町を訪ねたのではないで

PAVIA 1882.10.19



パヴィーア駅
1862年のミラノ・トーレベレッティ線の開通と同時に仮駅舎で開業し、1867年に現在の中央の2階建てのメインと両翼を持つかたちの駅舎となった。

しょうか。そしてフィレンツェに向かい、パラッツォ・メディチ・リッカルデイとパラッツォ・ストロツィのコーニスを描いています。また、フィレンツェを起点にピサとシエナに行ったことは長沼との手紙に残っています。

鈴木 そして辰野はピサに行き、大聖堂の横のカンポサントとカヴァリエリ広場を見たのでは。

藤森 それから陸沿いに、ローマへ。

河上 ローマの公使館で働いていた松岡^{ひさし}壽の3月2日の日記に、松岡と辰野は同窓の工部大学校卒の電気工学者、志田林三郎と「ピアッツァ・ファルネジオーラ」に「フレスコ画を見に行く」と記されています。この固有名詞は不正確で、訪れたのはミケランジェロがファサードを手がけたパラッツォ・ファルネーゼか、ラファエロによるフレスコ画のあるヴィラ・ファルネジーナでしょう。話が前後しますが、2月5日に彫刻家の長沼もヴェネツィアからローマにやってきて、3人でカフェグレコに行っています。11日にはファルコーネというお店で飲みすぎて、ふと気が付くと冬の最中なのに長沼のコートが無い。松岡の日記には、イル・メッサツジェーロという新聞の忘れ物届け欄に掲載をかけあったとありますが、出てこなかったのでしょうか。そこで年長

VERONA 1882.10.24



パラッツォ・グスタヴェルツァ
コーニス廻りのスケッチには「偉大なヴェローナの建築家であるサンミケーリによってなされた」と記述がある。円形劇場にも10月24日に訪れた。

の辰野が松岡とお金を出し合い、長沼に新しいコートを買ってあげるといふ男気のあるところを見せました。長沼はそのコートを着てヴェネツィアに帰って行きました。

中島 お金といえば後に工手学校の会計主任を辰野金吾、次は妻木頼黄が担当しました。妻木が亡くなった時に追悼記事を辰野が『建築雑誌』に書いているのですが、建築のことはちっとも書かずに、「妻木が建築学科の会計主任になった時は5千円の借金があったが、彼がすべて黒字に転換した。素晴らしい」と堂々と記した。前任者は誰だろうと思ったら、辰野金吾でした(笑)。

藤森 妻木は一応2年間だけ工部大学校でコンドルに学んで、アメリカ留学から帰ってきて官庁に勤務した。もう一つ妻木について辰野が評価していたのは、妻木が汚職を一掃したことです。明治政府の営繕、要するに役所の建築を作る部署には江戸時代の普請方とか作事方の連中が全部生き残っていた。立川知方とか朝倉清一とか幕府の役人が全員習慣としてやっていたことを妻木は一掃した。幕臣、役人の子であり、お金の動きに明るかった可能性がある。

清水 たぶん辰野は正攻法でしか攻められない。根回しはしてはいけなそうと

VENEZIA 1882.10.30-12.20



パラッツォ・ドゥカーレの大階段
ヴェネツィアでは、数日間に渡ってパラッツォ・ドゥカーレの大階段、門扉、柱頭装飾、天井装飾等を10葉描いた。

たのでしょうか。(笑)。

藤森 妻木は裏のことも知っていて、汚職を無くすにはどうすればいいか考えた(笑)。面白いね。

河上 そして辰野はローマからパリに戻り日本に帰りますが、ルートはわかっています。

杉原 最後に、現代の若者や読者にもイタリアに向かうグランドツアーを勧めたいと思いますが、いかがでしょうか。

藤森 私は、ヨーロッパに行くのであればイタリアだけ行けば良いと最近思っている。世界中でいろいろ変なものを見てきましたけれど、結論は、建築の素養、基本を身に付けようと思ったら、石造についてはイタリア、木造については日本だけで十分です。イタリアはやはりとんでもない国だと思うよ。イタリアに歴史的に近いのはフランスです。僕が学生だった頃の先生は東大を出るとイギリスに行った。桐敷真次郎生。桐敷先生はイタリアを通過して、自分の対象のイギリスに着いた時には「この国に学ぶものは何もない」と言った。私もそう思います。すぐ行って建築を勉強するにはイタリア。

河上 私もやはりグランドツアーを勧めたいと思います。辰野にとってイギリスは留学先、フランスはバージェス先生の

FIRENZE 1882.12.22-1883.01.17



パラッツォ・ストロツィ
1883年1月17日付けでパラッツォ・ストロツィのコーニスをスケッチで描いた。

足跡を訪ねる場所、そしてイタリアは建築学徒としては教養の範囲であり、日本の近代建築を作る上で参考になるものがたくさんあったから訪れたのでしょうか。辰野はその後日本銀行を作る頃に、地震直後のイタリアのイスキア島へ再び視察に行ったという記録があります。現代の日本からしても、イタリアは随分隔離した時間と土地という印象がありますが、だからこそこうした古いものにヒントがあると私は思います。

清水 辰野のグランドツアーを追いかけてフランスとイタリアを旅して、辰野が何を見ていたかのかが非常によく分かりました。全体を見ているのではなくて屋根や窓、装飾など細かいところばかり見ている。これはバージェス先生に習った「美術建築」を実現するための方法を考えていたのです。たぶんそこを辰野はすごくやりたくて日本に戻ってきたのですが、自分だけでは出来なかったみたいですが、でもすごく辰野が追い求めていた事がわかりました。グランドツアーとは実際に自分が何をやりたいのかを確かめる機会です。だからグランドツアーには絶対に行かなくてはいけないと言いたいですね。

PISA 1883.01.21



ピサ駅
1871年竣工のピサ中央駅。第2次世界大戦で損傷したが、細部の変更を加えた上で再建し現在に至る。

SIENA 1883.01.22-29



カンポ広場俯瞰
高さ102メートルのマンジャの塔がある建物がプブリコ宮殿。13世紀から市庁舎。パリオ祭ではカンポ広場の石畳に土を盛り競馬が行われる。

ROMA 1883.01.30-03.02



カフェ・グレコ
辰野は2月5日に浅野長勲公使に松岡壽、長沼守敬とともに昼食に招かれた。その晩に3人でカフェ・グレコに行ったと松岡の日記にある。

2 JOE COLOMBO 1952 - 1971



ジョエ・コロomboは、1960年代はじめにミラノサローネの開幕と時を同じくして彗星のように現れた。そして1960年代の終わりには40歳を目前にしてイタリアで最もメジャーなデザイナーの地位へと駆け上がった。そして1971年に41歳で突然この世を去り伝説の人物となった。

彼の残した主要な作品のすべてがたった10年の間に生み出されたものであることに驚きを禁じ得ない。彼のデザインは彼以前のデザインの影響を受けずに生まれ、彼以後のデザインに計り知れない影響を与えた。その最大の特徴は、新しい暮らし方や場所や空間を生み出す家具やプロダクトに見て取れる。

本章では、彼の作品の中でも特に空間性の高いデザインに注目して、1952年の「原子力都市」から1971年の「トータル・ファニシング・ユニット」までの69作品を時系列で紹介した。照明器具から家具、インテリアデザイン、展示会場構成、さらには都市計画まで多岐にわたるが、共通しているのは、そのオブジェクトが置かれた場所や空間を一変するパワーを持ち合わせていることだ。このようなオブジェクトをマッテオ・ヴェルチェローニ氏は空間を生成するという意味で「スペース・ジェネレーター」と称し、私は、建築の機能を併せ持つ家具という意味で「建築家具」と呼んでいる。

日本ではまだジョエ・コロomboに関する本格的な書籍が無い。NICHE編集部では取材に先駆け2016年3月末にミラノの墓地に眠るジョエ・コロomboを訪ね、日本、そしてイタリアにおいて彼の作品を2か国語で伝えることを誓った。そして本章を、ジョエ・コロomboを再考するための作品集として仕上げようと考え、スタジオ・ジョエ・コロomboと緊密な協力の下に編集作業をすすめてきた。彼が亡くなって以来、すべての作品の権利を引き継ぎ、膨大な資料を維持管理してきたイニャーツィア・ファバタ氏への巻頭インタビューがジョエ・コロomboの最もパーソナルな一面を浮かび上がらせている。

夭折の天才はどのように未来を描いていたのか。読者諸氏の感想を楽しみにしている。(鈴木敏彦)

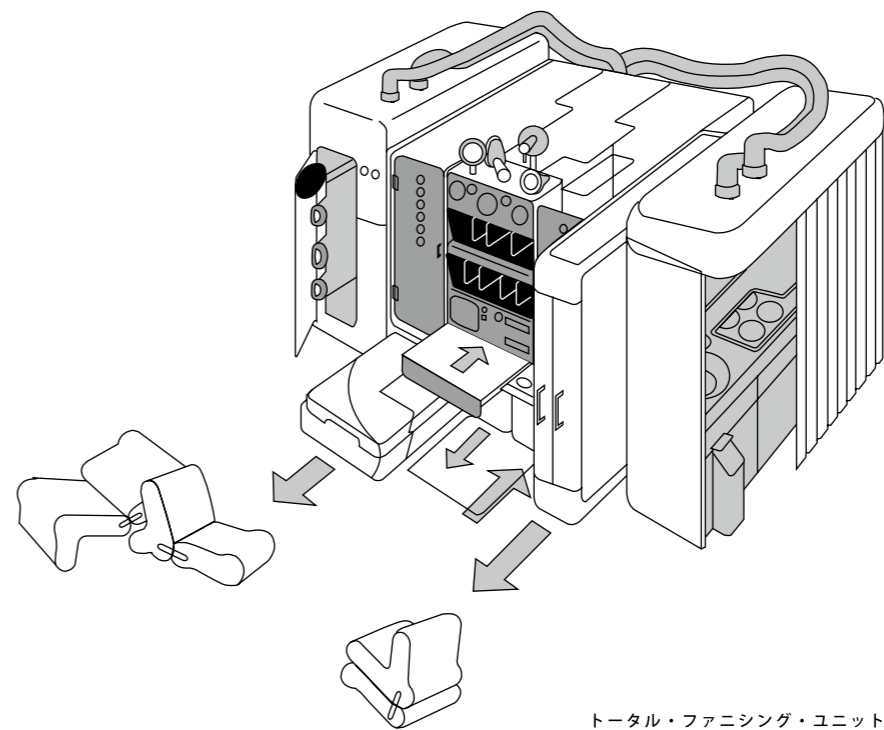
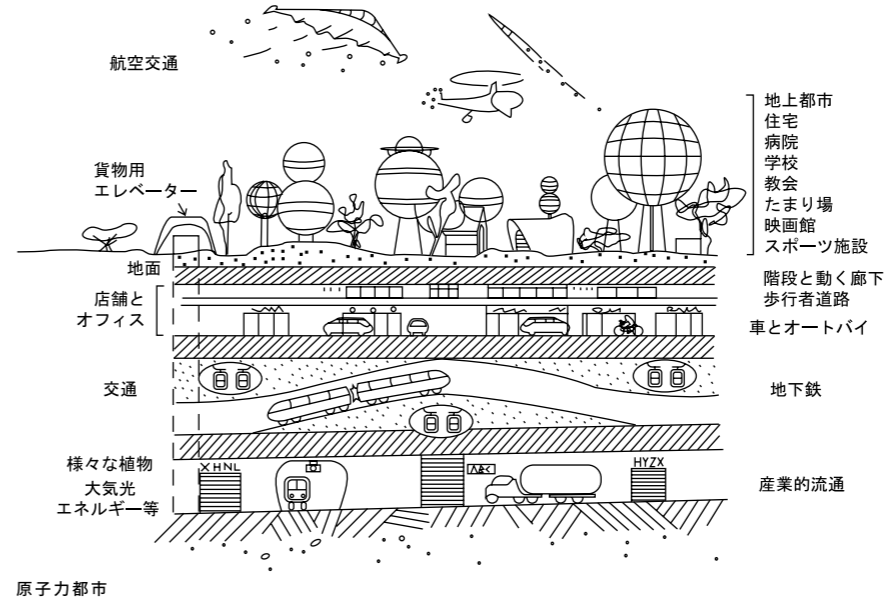
ジョエ・コロomboのデザインは、ミラノにデザイン事務所を32歳で開設してから、心臓発作で倒れる41歳までの間に集中的に生み出された。10年という短い生涯の割に残した膨大な作品数もさることながら、モノと空間の領域を横断し、時代を超越した新しさが際立っている。

ジョエ・コロomboの才能の片鱗は、ブレラ・アート・アカデミーとミラノ工科大学で学んでいた1952年に構想したユートピア、ヌクレア・シティに既に見取ることができる。球体のアパートが地表の自然あふれる公園や積層する地下都市の間を昇降する姿は、まさにモバイルアーキテクチャーの発想であり、常に新しい素材や技術に挑戦するその後のデ

ザインワークを予見している。

また、1954年のテレビ・インスタレーションは、彼の最初の建築プロダクトデザインといえるだろう。彼はまだ学生でありながら、第10回ミラノ・トリエンナーレという大舞台のデザインを担当することになった。ジョエ・コロomboは単にテレビを置く場所だけではなく、テレビと人の新たな関係性をデザインした。テレビの上方に浮遊する小さな天井は日陰を作り出し、鑑賞者の居場所を暗示する。

1971年、数多くの革新的なデザインを生み出し、イタリアのデザイン界の頂点に駆け上がった頃に、突然の死が訪れる。トータル・ファニシング・ユニットが彼の最後の作品となった。ジョエ・コロomboは長年暖めてきた可変性の高い生活ユニットの構想を、集大成として実現した。トータル・ファニシング・ユニットは、キッチン、クロゼット、書斎、ベッドルームそしてバスルームという独立した部屋をコンパクトに一体化したカラクリ箱である。それぞれのセルは可動式で独立性があるため、必要に応じて様々な間取りを構成する。例えばクロゼットを引き出すと壁になり、キッチンとベッドルームの間仕切りとなる。また、2つの引き出し式のベッドの奥にはそれぞれの書斎が組み込まれている。テレビの前にテーブルを引き出し、マルチチェアを書斎から持ち出せば、そこはダイニングルームになる。キッチン、バスへの給水は、天井上のチューブによって供給される。トータル・ファニシング・ユニットは、家具であり同時に建築そのものである。



3 永遠の都 ローマ

「ローマ」とはイタリア半島中央部に位置する一都市の名称だが、その名詞が示す意味はそれだけにとどまらない。「ローマ」とは「都市」であり、その都市を首都とする「帝国」であり、その「帝国」が体現した「文明」であり、その「帝国」を指向する「概念」＝「インペリウム」でもある。

ここでいう「帝国」とは西洋史でいう「帝国」のことであり、「皇帝」が治めているか否かは関係なく、様々に異なる領域を支配する国家的存在のことである（12世紀の「アンジュー帝国」など）。その「帝国」は地中海沿岸を制覇し、ライン川以西とドナウ川以南のヨーロッパを包含する広大な地域を支配して一文明を作り上げた。「ローマ建築」（Roman architecture）、「ローマ都市」（Roman cities）などと称する場合の「ローマ」はこの文明のことを指す。

一方、西ヨーロッパ世界において、古代ローマ帝国が滅亡した後も、ローマ文明は「古典」（classic）として、中世・近世のヨーロッパの人々の憧れであり続け、のみならず、「ローマ」は「インペリウム」（imperium）という概念として受け継がれた。かくして、都市ローマを領域に含まず、古代ローマ帝国と直接の王朝的関係も持たない「神聖ローマ帝国」（Sacrum Imperium Romanum, Heiliges Roemisches Reich）なるものが中世から近世にかけてドイツ語圏を中心に存在したのである。フランスにとってもこの概念は重要であり、フランスの王朝は神聖ローマ帝国と同様、800年に「ローマ皇帝」の冠を戴いたカロルス（Carolus）大帝を直接の始祖と仰ぎ続けた。神聖ローマ帝国もフランス王国もこのカロルスを、それぞれ「カール1世」（Karl I）、「シャルル1世」（Charles I）としてカウントしているのである。



ローマ・バ ロック建築 24景

文・写真= 中島 智章

都市ローマの広がりとはバロック建築

前節でみた通り、ヨーロッパの文明・文化は「ローマ」を抜きには語れず、それは西洋建築史においても同様である。西洋建築史上、都市ローマの建築シーンはあらゆる時代で名建築を生み出してきたが、とりわけ、古代ローマ帝政期とバロック期にはヨーロッパの他の地域には中々みられない建築の質と量の充実がみられる。本稿では後者の方の代表的作品を紹介することになる。もともと、バロック建築、バロック芸術は、16世紀半ば以降の「カトリック改革」で見直され再建された信仰が情熱をもって建築や芸術の形で具現化したもので、ローマこそがその源であり中心だったのである。

だが、古代の都市ローマの中心が、フォロ・ロマーノ（フォルム・ローマーヌム）とフォーリ・インペリアーリ（皇帝たちのフォルム群）のあたりで、アウグストゥス帝（在位紀元前27—紀元後14）治世下には、パンテオンを含むカンプス・マルティウスも新都心として開発されて拡大していったのに対し、中世から近世にかけての都市ローマの都市領域は古代よりもはるかに小さかった。かつてのカンプス・マルティウスにも重なる、テヴェレ川が湾曲したところに挟まれた部分とトラステヴェレといったところだろう。この比較的狭いところに大小のバロック建築がひしめき合っているのである。

2017年8月下旬、筆者らはこの歴史的中心市街地中のかつてのスペイン人地区に位置する住宅に投宿し、そこから徒歩でナヴォナ広場などに赴き、歴史的中心市街地にある代表的なバロック建築を訪ねた。バロック建築の展開という点では、サン・ピエトロ・イン・ヴァチカーノ使徒座聖堂とバチカン宮殿を中心とする現在のバチカン市国、および、当時、都市化が始まりつつあったクイリナーレ通りとその周辺も見逃せない。スペイン広場、スペイン階段、トレヴィの泉水などの後期バロックの建築作品も一般的には有名だが、本稿ではバロックの代表的

な建築家達の作品が多くみられる、以上の3地区を紹介していく。なお、次節より「ローマ」は「都市ローマ」を指すこととする。

歴史的市中心街地のバロック建築

中世・近世のローマの市街地は、現在のコロソ・ヴィットーリオ・エマヌエーレIIを目抜き通りとする、おおよそ、テヴェレ川からパラッツォ・ヴェネツィア付近までに広がっていた。テヴェレ川を隔ててその南側には、サンタ・マリア・イン・トラステヴェレ教会堂とその広場を中心とするトラステヴェレ地区が広がる。さらに、16世紀末の教皇シクストゥス5世（Sixtus V, 在位1585—90）治世下には、かつての古代ローマ時代の都市領域を貫くように直線道路が整備され、主要な教会堂や市門に隣接する広場が整えられていった。多くの広場の中央にはランドマークとして古代エジプトの宗教的記念碑であるオベリスクが設えられた。これらのオベリスクは古代ローマ時代にエジプトから戦利品としてもたらされ、スタディウム（競技場）などを飾っていたが、時を経て埋もれていたのを再建立したのである。

10箇所ほどあるオベリスクのうち、代表例は、ローマの北の市門の内側に接するポポロ広場である。ポポロ広場からは、パラッツォ・ヴェネツィアの方へ伸びるコロソ通りを都市の中心軸として、ポポロ門を背にして左側にスペイン広場へ伸びるバブイーノ通り、右側にアウグストゥス帝廟の方へ伸びるリベッタ通りが整備され、バロックの劇場建築の舞台の上のような一点透視図法が強調された劇場的都市空間が現出した。3本の通りの間には「双子の教会堂」サンタ・マリア・デイ・ミラーコリ教会堂（コロソ通りの西側）とサンタ・マリア・イン・モンテサント教会堂（同東側）が建立された。

ナヴォナ広場にもオベリスクが配されている。この広場はドミティアヌス帝（在位81—96）のスタディウムの廃墟の上

に整備され、南北方向に長い形状にスタディウムの形を偲ぶことができる。また、北端の地下においてスタディウムのテートルム（観客席）の部分の遺跡が公開されている。ナヴォナ広場にあるバロック建築としては、広場西辺中央部を占めるサンタニェゼ教会堂があり、広場の北西にはサンタ・マリア・デッラ・パーチェ教会堂がある。

ナヴォナ広場の東側に目を向けると、ハドリアヌス帝（在位117—38）治世下に再建されたパンテオン（118—25）、ハドリアヌス神殿（145）がある。パンテオン前のロトンダ広場にオベリスクを頂いた泉水「パンテオンの泉水」（1575）（オベリスクは1711年に追加）、パンテオン背面の南東側のミネルヴァ広場にも、小ぶりながら印象的な象の彫像を台座としたオベリスク（1667）がみられる。

さらに東に歩を進め、イエズス会創設者の名を冠したサンティニャーツィオ・ディ・ロヨラ教会堂を目指していくと、サンタ・マリア・マッダレーナ教会堂に行き当たる。手掛けた建築家たちはビッグネームというわけではなく、小規模な作品だが、後期バロックの優れた作品である。パンテオンとサンティニャーツィオ・ディ・ロヨラ教会堂の間を移動する際には是非立ち寄りたい。

さらに東へ進み、サンティニャーツィオ・ディ・ロヨラ教会堂に至る。もともと、イエズス会総長イグナチオ・デ・ロヨラが「コッレージョ・ロマーノ」という学校を設立した場所であり、1622年にイグナチオが列聖された後の1626年にその名を冠した教会堂の建設が始まり、1650年に完成した。ファサードはアントニオ・サッソ（Antonio SASSO）による典型的なイル・ジェズ型ファサードで、その前にはダイナミックな曲線からなる平面のサンティニャーツィオ広場が整備された。だが、ここでの見所は教会堂本体ではない。透視図法の名手といわれたイエズス会修道士の手になる2点のトロンプ・ルイユ（騙し絵）は、建築と彫刻と絵画が融合して一つとなった宗教的

情熱があふれるバロック室内装飾の白眉ともいえる作品である。

透視図法の知見を何らかの形で空間造形に生かすのはローマ・バロック建築によくみられる特徴である。その意味でパラッツォ・スパーダの「ガッレリア・プロスペッティカ」（透視図法ギャラリー）はローマ・バロックの空間造形の代表例といえる。パラッツォ・スパーダは1632年に枢機卿ベルナルディーノ・スパーダ（Bernardino SPADA）が取得してからこの名で呼ばれるようになり、それに伴って様々な増改築が行われた中でこの新たなギャラリーも建設された。

バチカン市国のバロック建築

ローマの歴史的中心市街地には大作から小品まで多くのバロック建築がひしめいているが、ローマ最大のバロック建築は、テヴェレ川を隔てた市街地の西側に広がるバチカンにある。使徒ペトロの墓所の上に建つというサン・ピエトロ・イン・ヴァチカーノ使徒座聖堂である。使徒ペトロの後継者たるローマ教皇の座る椅子「使徒座」は救世主大聖堂（現在のサン・ジョヴァンニ・イン・ラテラーノ司教座聖堂）に置かれていたが、15世紀以降、サン・ピエトロに移された。それにふさわしい大規模聖堂を建立するため、1503年、4世紀の初期キリスト教時代の教会堂は取り壊され、ブラマンテが当初の計画を立案したが、紆余曲折を経てミケランジェロとその後継者たちが最終案を実施に導いて、1590年、集中式のルネサンスの殿堂が完成した。そして、17世紀に入るとミケランジェロのファサードが取り壊され、身廊、側廊など（1614—24）が増築された。この増築により集中式平面が三廊式のバシリカ式平面となった。さらに疑似楕円形と台形を組み合わせた鍵穴のような形のサン・ピエトロ広場（1656—67）が整備されて、カトリック世界最大の教会建築が現出した。

クイリナーレ通り周辺のバロック建築

クイリナーレ通りはパラッツォ・デル・クイリナーレから丘陵の尾根上を北東へ一直線に伸びる道路で、この直線道路は名称を変えながらピア門まで続いている。そして、この道に沿ってローマ・バロック建築を代表する3名の建築家の代表作が並んでおり、ローマ必見のロケーションといえるだろう。クイリナーレ通りの起点となるのは、中央にオベリスクを配置したクイリナーレ広場である。そこから200メートルほど進むと、ベルニーニが手掛けたサンタンドレア・アル・クイリナーレ教会堂、100メートル強進むと、ボッロミーニによるサン・カルロ・アッレ・クワットロ・フォンターネ教会堂がある。この教会堂は、クイリナーレ通り、ヴェンティ・セッテンプレ通りとクワットロ・フォンターネ通りが交わる交差点の南隅に建つ。この交差点の四隅にそれぞれ泉水が設けられているので「四泉水のある聖カルロ」という名を冠している。

ここからさらに400メートル行くと、サンタ・スザンナ教会堂、ラルゴ・ディ・サンタ・スザンナ（サンタ・スザンナ広小路）を隔ててサンタ・マリア・デッラ・ヴィットーリア教会堂という、ともにマデルノによる教会堂が並んでいる。現在は美術館として使われているパラッツォ・バルベリーニもクイリナーレ通りからほど近いところにある。クイリナーレ通りはサン・カルロ・アッレ・クワットロ・フォンターネ教会堂のところまでクワットロ・フォンターネ通りと直交し、そこから先はヴェンティ・セッテンプレ（9月20日）通りとなるが、この交差点で左折し、尾根から降りていくと右手にパラッツォ・バルベリーニがみえてくる。その名の通り、教皇を排出したローマの名門都市貴族バルベリーニ家の宮殿である。建築だけでなく2階の大広間のピエトロ・ダ・コルトーナによる天井画「神の摂理の勝利」も見逃せない。

ローマ・ バロック建築 24景



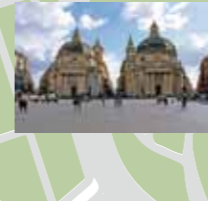
02 ナヴォナ広場全景



03 ベルニーニの「大河の泉水」



04 サンタ・マリア・デッラ・パーチェ教会堂正面ファサード



01 ホボロ広場から望む双子の教会堂



05 パンテオンの泉水



06 ミネルヴァのオベリスク



07 サンタ・マリア・マッダレーナ教会堂ファサード



08 サンタ・マリア・マッダレーナ教会堂身廊ヴォールト



09 スペイン階段
サンティニャーツィオ・ディ・ロヨラ教会堂前のサンティニャーツィオ広場



10 交差点天井画「サンティニャーツィオの偽ドーム」



11 身廊天井画「サンティニャーツィオ・ディ・ロヨラの栄光」



16 クイリナーレ広場



17 サンタンドレア・アル・クイリナーレ教会堂ファサード



18 サンタンドレア・アル・クイリナーレ教会堂内観



ヴァチカン市国

15

13

14

テベレ川

04

ナヴォナ広場

02

03

サンタニェーゼ教会堂

07|08

パンテオン

05

06

09|10|11

トレビの泉水

16

21|22

19|20

17|18

クイリナーレ通り

ヴァンティ・セッテンブレ通り



12 パラッツォ・スパーダのギャラリー



13 サン・ピエトロ使徒座聖堂正面ファサード



14 サン・ピエトロ広場とオベリスク



15 サン・ピエトロ使徒座聖堂身廊

12

コルソ・ヴィットーリオ・エマヌエーレII



19 サン・カルロ・アッレ・クワットロ・フォンターネ教会堂ファサード



20 サン・カルロ・アッレ・クワットロ・フォンターネ教会堂内観



21 パラッツォ・バルベリーニのファサード



22 パラッツォ・バルベリーニの階段室



23 サンタ・スザンナ教会堂ファサード



24 サンタ・マリア・デッラ・ヴィットーリア教会堂内観と「聖テレサの法悦」

フォロ・ロマーノ

フォーリ・インペリアーリ

NICHE PASSPORT

海外建築レポート

若者よ、旅に出でよ！
工学院大学建築学部同窓会では、
在学生の海外研修をサポートして
いる。2017年度の海外渡航奨励
金制度を利用した学生たちからレ
ポートが届いた。



Flight 03
February 2017

ロンドンの構造美をめぐる 荒井 雄大



2月16日 羽田発 ロンドン着
2月17日 ザ・シャード、ロンドン・ブリッジ、シティホール
2月18日 テート・モダン、ミレニアム・ブリッジ
2月19日 ロイズオブロンドン、30セントメリーアクス
2月20日 ワンロンドンウォール、100ウッド・ストリート、ロンドンミュージアム
2月21日 ベンギンパウル、大英博物館
2月22日 ビッグベン、アクアティクスセンター
2月23日 ノッティング・ヒル
2月24日 ロンドン発
2月25日 羽田着



Flight 04
February 2017

アメリカの空間構造と高層建築 伊藤 賢治



2月20日 成田発 サンフランシスコ着 市街散策
2月21日 サンフランシスコ近代美術館、AT&Tパークツアー見学
2月22日 ゴールデンゲートブリッジ
2月23日 オラクルアリーナ
2月24日 シカゴ着、トランプインターナショナル・ホテル&タワー
2月25日 シカゴ美術館、ミレニアムパーク、ウィリスタワー、シカゴ商品取引所
2月26日 建築オーディオツアー（AONセンター、IBMビル、アクアタワー、ジェームス・R・トンソン・センター、チェイスタワー、デイリーセンター、トリビューンタワー、マリナーシティ、リグレイビルディング、ルッカリー、連邦政府センター）ユニオンステーション
2月27日 ジョン・ハンコック・センター、レイクポイントタワー、レイクショア・ドライブ・アパートメント、シカゴ発
2月28日 羽田着



Flight 05
March 2017

アドルフ・ロースとベルリンの建築を求めて 谷口 翔太



3月5日 成田発 ウィーン着、ウィーン分離派会館、カフェ・ムゼウム、マンツ書店
3月6日 ホーナー邸、ショイ邸、ルーファー邸、シュタイナー邸
3月7日 オーストリア応用美術館、ヴォーティーフ教会、ウィーン自然史美術館
3月8日 マヨリカ・ハウス、メダリオンハウス
3月9日 郵便貯金局、ハースハウス、ローズハウス、アメリカンバー
3月10日 ブラハへ移動、旧市街地広場、ティーン聖母教会・火薬塔・ダンスンダハウス
3月11日 ミュラー邸、ブラハ城、聖ヴィート大聖堂・ストラホフ修道院
3月12日 ベルリンへ移動
3月13日 ドイツ連邦議会議事堂
3月14日 ギャラリーラファイエット、ソニーセンター、ユダヤ博物館
3月15日 ユニテ・ダビタシオン、パウハウス・アーカイブ、新ナシヨナルギャラリー、ベルリン・フィルハーモニー、タイムラーシティ
3月16日 ベルリン発
3月17日 成田着



Flight 06
August 2017

オランダの国土開発とその使い方を学ぶ 山本 真央



8月24日 成田発 アムステルダム着
8月25日 アルクマールにてチーズ博物館、聖ラウレンス教会、デン・ウフェル・締切り大堤防
8月26日 ダルゲルダムにてWaterlandse zeedijk at durgerdam、アイブルグ地区
8月27日 ユトレヒトにてユトレヒト大学、ドム塔、ミフィー博物館、セントラル美術館
8月28日 デン・ハーグにてビネンホフ、スフェヘニンゲン大通り
8月29日 ライデンにてライデン中央駅、デ・ファルク風車博物館、要塞
8月30日 ロッテルダムにてロッテルダム駅、キュービックハウス博物館
8月31日 ゴーダにてマルクト広場、聖ヤン教会
9月1日 ロッテルダムにてマルクトハル、クンストハル、都市公園Dakpark Rotterdam
9月2日 オランダ建築協会、Bergse Linker Rottekaade
9月3日 アムステルダムにてゴッホ美術館、WoZoCo
9月4日 アムステルダム発
9月5日 成田着

Flight 01
February 2017

建築・都市・観光が共存する国スペイン 阿部 百合子



2月14日 成田発
2月15日 バルセロナ着 ランプラス通り見学
2月16日 サグラダ・ファミリア聖堂、サン・パウ病院
2月17日 グラシア通り
2月18日 モンジュイック地区見学、カタルーニャ音楽堂
2月19日 旧市街、グエル公園
2月20日 バルセロナ発 マドリッド着 ソフィア王妃芸術センター
2月21日 アトーチャ駅、マヨール広場
2月22日 マドリッド発 トレド着 トレド旧市街
2月23日 トレド発 マドリッド着 アルカサル
2月24日 マドリッド発 セビリア着 スペイン広場、アルカサル
2月25日 カテドラル、メトロポール・バラソル、教済病院
2月26日 ビルヘン・デ・ラ・ベニャ広場、コンステイトゥシオン広場
セビリア発 ミハス着
2月27日 ミハス市内 ミハス発
2月28日 アンハンブラ宮殿
3月1日 旧市街 グラナダ発 バルセロナ着
3月2日 バルセロナ発
3月3日 成田着

Flight 02
February 2017

カラダで学ぶ2カ国の建築と都市 櫻本 敦士



2月14日 羽田発 バリ着
2月15日 オルセー美術館、ボンビドーセンター、シャンゼリゼ通り、凱旋門
2月16日 ノートルダム教会、サントシャベル教会、ルーブル美術館
2月17日 オペラ座、アラブ世界研究所、ブラジル学生会館、フランス国立図書館
2月18日 サヴォア邸、ラロッシュ邸、ジャンヌレ邸、ルイ・ヴィトン財団美術館
2月19日 ル・ランシーのノートルダム教会、ベルフォールへ移動
2月20日 ロンシャンの礼拝堂、リヨンへ移動
2月21日 ラ・トゥーレット修道院、サン・テグジュベリ空港駅、リヨ市内見学
2月22日 バルセロナへ移動、サグラダファミリア、バルセロナパビリオン
2月23日 ビルバオ・ゲッゲンハイム美術館、ビスカヤ橋など
2月24日 ボルドーへ移動、ミロワール・ドー、市内見学
2月25日 ボルドースタジアム、市内見学、ル・サンジェームス宿泊
2月26日 バリへ移動、バリ発
2月27日 成田着 帰国

建築・都市・観光が共存する国スペイン

阿部 百合子



はじめに

ある調査では、スペインの訪問者数はフランス、アメリカに次ぐ3位である。そして、スペインの観光地には多くの有名建築物がある。サグラダ・ファミリアをはじめとする有名建築、イスラム建築の最高傑作ともいわれるアルハンブラ宮殿などである。また、バルセロナは近代都市計画発祥の地でもある。スペイン程多くの建築物が観光地になっている国は他になく、世界有数の建築大国である。これらの建築物、都市はなぜ多くの観光客を惹きつけるのか。建築、都市、観光の3点はどのように影響しているのか。それらの魅力や特徴を見学したいと考えスペインを渡航先に選んだ。

スペインの都市

スペインの都市で最も印象的だったのはバルセロナの新市街地だ。一辺が113.3メートルのグリッド状に区画が整えられており、一つの区画の建物は大きな口の字になっていた。ここまで統一された都市計画を初めて実際に目にし、徹

底的に計画が実現されていることにとっても驚き感動した。

また、色の統一が行われているアンダルシア地方の観光都市、ミハスの街並みの真っ青な空と白い町は絵葉書の中にあるような感覚を与える。年間の日照日数が300日を超えるミハスでは、光を反射して日差しを和らげる白い色の漆喰が古くから使われていた。現在もこの歴史を生かした景観規制が行われ、白い街並みを見るため、多くの観光客が訪れている。

スペインの建築

スペインにはアントニオ・ガウディをはじめとする有名建築家による建築物が多く、現在世界遺産に登録されている建造物も多い。サン・パウ病院はその一つで有名観光地の一つとなっているが、敷地内の一部は国連やEUのオフィスや研究所として使用されていた。カサ・ミラも一部は公開され観光地となっているが、住宅やカフェとしても使用されている。遺産として保存するだけでなく、カフェや住宅、オフィスとしても使用する

ことで、観光客と地元住人という立場の異なる人々にとって必要な建築となり、歴史的建造物を維持し続けられるのではないかと考えた。

旅を通して

都市では、美しい街並みを保存するために多くの規制がかけられ、建築ではオリジナルの状態を保存だけでなく利用し続けるなど、人々が都市の景観や歴史的建造物の維持に対して積極的であると感じた。さらに、観光地となる建造物を地元の住人も使用することで、建物が都市の一部として溶け込んでいた。私は、建物を見学し、その都市の一部を体験した感覚に魅了された。有名観光地となっている建築を地元住人が使用することが少ない日本では、保存に注目し維持するため、建物として使用し続けることが少ないと感じる。今回の旅を通して、スペインの観光都市や観光地で建築を保存および使用する行為が生む魅力を体験することができた。最後に、このような貴重な機会を与えて頂いたことに感謝する。



町全体の建物が白で統一されたミハス。



サン・パウ病院。現在も一部の建物はオフィスや研究所として使用されている。

観光客や地元住人で賑わうカサ・ミラのカフェ。



バルセロナを代表する観光地の一つであるカサ・ミラ。観光地としてだけでなく、現在、住宅、カフェとしても使用されている。



観光都市バルセロナを代表する観光地の1つであるグエル公園。



阿部 百合子 Yuriko Abe

1996 茨城県生まれ
2015 都立小石川中等教育学校 卒業
工学院大学建築学部学部総合入学
将来の夢 都市計画に関わる仕事がしたい



サヴォア邸。シークエンスに圧倒される。

はじめに

今回私がフランス・スペインに渡航するにあたって決めたテーマは、ル・コルビュジエに代表される近代建築、ジャン・ヌーベルなどの現代建築の空間を体感すること、都市とトラムの関係性を考察することであった。

近代建築と内部空間

建築は実際に体感しないとわからない。これはよく言われることであるが今回がその良い例である。サヴォア邸はル・コルビュジエの近代建築の5原則である「ピロティ、屋上庭園、自由な平面、水平連続窓、自由な立面」の代表例である。実際に訪れてみるとこの建築の見るべき点はそれだけでは収まらなかった。サヴォア邸の中に入って歩いていくうちに、今までシークエンスという言葉の意味を本当には理解できていなかったのだということに気づかされた。徐々に視線が変わっていくスロープや、トブライトからの光に誘導される廊下、そして頂上までが物語のようなプランの構成など、断片的に頭でしかわかっていな



ロンシャンの礼拝堂。礼拝堂内部の張り詰めた空気と優しい光。



サグラダファミリア。ステンドグラスによって聖堂内がオレンジ色に染まっている。

かったものを連続的に体感することができた。この経験は今回の旅行の中で、近代建築を理解するのに大きな収穫となったと考えている。

意匠と構造

サグラダ・ファミリアはカテナリー曲線を利用した構造で、重りをつるした逆さ吊り模型が有名だ。しかし実は構造で注目すべき点はそれだけではない。基本的な構成はゴシックの様式だが、サグラダ・ファミリアではゴシック建築の特徴であるフライングバットレスが見当たらない。どのようにしてこの高い天井を持つ聖堂を支えているのかというと、巨大な柱がある高さから枝分かれしていて、それが自重を分散させることによって支えている。この枝分かれした形は意匠的に木をイメージしてつくられている。一見装飾のように見える枝分かれさえも構造の役割を果たしていることにとても驚かされた。

都市とトラム

ボルドーの市庁舎前にあるミロワール・ドーは美しい。ミロワール・ドーは水がないときは広場として、水が張っているときは奥から空、市庁舎、トラム、そして一番手前にそれら全てを映し出す水盤のレイヤーとなって、子供が遊んでいる姿が見られる。しばらく立ち止まってこの場所を観察していると、ここを通る人々はみな足を止めて、眺めたり、写真を撮ったりとこの景色に魅了されていることがわかる。そしてここを走るトラムは一部区間が無架線となっていて地面から電気を供給する設計のため、電線や電柱が街の景観を邪魔しない。排気ガスを出す車とは違いトラム自体が低騒音かつクリーンだ。トラムが川沿いや広場を通るところは緑化されていて、散歩すると気持ちが良い。このようにトラムは人々の単なる交通手段となるだけでなく、人が密集した都市での生活の質を豊かにするための要素となっていると感じた。



ビルバオ・グッゲンハイム美術館。デコンストラクションの建築をこの旅行で初めて目にした。



ミロワール・ドー。撮影する人、演奏する人、散歩するカップルがこの景色を背景にそれぞれの時間を過ごす。



ジャン・ヌーベル設計のル・サンジェームス。今まで感じたことのない幸せな気分になった。



櫻本 敦士 Atsushi Sakuramoto

1992 群馬県生まれ
2011 佐野日本大学高等学校 卒業
2014 工学院大学建築学部建築デザイン学科 入学
2017 工学院大学建築学部建築デザイン学科 榎原研究室在学中
将来の夢 交通に関係する建築に携わる仕事をしたい。



ロンドンの構造美をめぐる

荒井 雄大



旅の目的

構造を学ぶ私にとってロンドンの街並みは非常に魅力的なものである。構造的に有名な建物が集まったロンドンの金融街にて、リチャード・ロジャース、ノーマン・フォスター、ザハ・ハディドら偉大な建築家が設計した建物を自身の目で見て、そのスケールを感じる事が今回の目的であった。今回は人生初の単独での海外渡航となり不安もあるが、初の英語圏ということもあり私の英語がどの程度通じるかというのも非常に楽しみにしていた。

ロンドン市街

ロンドン市内に入ってまず驚いたのが、自然と歴史的建造物の多さである。東京で生活していると街角に自然と歴史を感じる建物に遭遇する瞬間はほとんどない。近代化が進んだ先進国では歴史的建造物は比較的都市部から離れたところにあるものだと当たり前のように思っていた。しかしロンドンには都市のど真ん中であろうが町にはリスがいて、地図を見れば大きな自然公園が必ず徒歩圏内にあ

る。何百年以上も前に建てられたであろう石造の建造物が全面ガラス貼りの建築物と共存し、ゴシック建築であるウエスト・ミンスター寺院の前を、車とバスが激しく行きかう光景は見ていて非常に面白かった。

ロンドン金融街

ロンドンの有名建築物が集中する金融街での目的はノーマン・フォスター設計の30セント・メリー・アクス、リチャード・ロジャース設計のロイズ本社である。30セントメリーアクスは、所属する研究室のテーマの1つであるシェル構造で無柱で支えられている。各層のオフィス空間はコアと外壁のシェルによって支えられている。近づく、柱のないオフィス空間を実現させるには部材が小さいのではと思う程であった。オープンハウスの時期ではないため内部に入ることは出来なかったが、写真の中で美しい曲面が描かれているように、実際に足を運び自身の目で見て建築のスケールを感じる意義を知ることができた。

オリンピック建築

2020年に東京オリンピックがあるなかで、他国のオリンピック競技場を見ておくことはこれからオリンピックの遺産を背負う一人として必要である。ロンドンオリンピックパークはケーブルネット構造のペロドロームといった主要競技の競技場が数多く集まっている公園である。ザハ設計のアクアティクスセンターを間近で見ると曲面の美しさに圧倒された。やはり今後使えるような建築は当たり前ではあるが、建築そのものが観光名所となるようなオリンピック競技場になることを東京でも願いたい。今回の海外渡航奨励金を申請する構造系の学生は少ないようであったが、ロンドンのような世界的に名高い構造家たちの建築物が集まる国を自身の目で見ることは貴重な機会となった。日本と比較しながら街を歩き海外から日本を見る経験ができた。今回の海外渡航の機会を与えて下さった方々に心から感謝の意を表する。



ロイズオブロンドン。リチャード・ロジャース設計のロイズ本社を下から仰ぎ見る



ロンドン金融街のシンボリック存在の30セントメリーアクス



ウエスト・ミンスター寺院。世界的に有名なゴシック建築の前を車が走り交う

曲線で描かれるザハ・ハディド氏設計のアクアティクスセンター



科学歴史博物館とゴシック建築の共存



荒井 雄大 Yudai Arai

1994 東京都生まれ
 2013 東大和南高等学校 卒業
 工学院大学建築学部建築学科 入学
 2017 工学院大学建築学部建築学科 (山下哲郎研究室) 卒業
 工学院大学大学院工学研究科建築学専攻 (山下哲郎研究室) 在学中
 将来の夢 都心に建つ超層建築のプロジェクトに関わりたい



AT & Tパーク。会場ツアーがあり見学が可能。

AT & Tパーク接合部
増設工事では既存の建物とのつなぎ目にクリアランスを設けて地震対策を行った。



旅の目的

空間構造を勉強していく中で、海外のスポーツ施設や高層建築を見学し、幅広い知識を得ることや、海外の生活を体験して日本や海外の良いところを見つけることが今回の旅の目的である。アメリカは東海岸では地震が少なく、西海岸では地震が多い。地震のない地域と日本のように地震のある地域を一度に見られる国ということからアメリカを渡航先として選んだ。

サンフランシスコ

サンフランシスコはアメリカ西海岸を代表する都市である。多国籍な都市でも過ごしやすいが、丘が多く、日常的に地震が多い地域として有名である。中心地を歩いていると建設中の建物を数多く見ることができた。私はただ建物を見学するだけではなく実際にスポーツを見学しツアーに参加して雰囲気味わうことも大事だと思い、AT&Tパークのスタジアムを見学した。ツアーでは、解説付きでスタジアム内のロッカールームやグラウンドを見学した。スタジアムを建設する際、地震に対して考えているようであった。

シカゴ

シカゴはミシガン湖の南西部にあるアメリカ第三の都市であり、高層建築が数多くある東海岸の都市である。また中心地から徒歩圏内に多くの高層ビルや美術館があり、建築ツアーが開催されている。そのため、シカゴではAirbnbで中心地の部屋を借りて宿泊し、現地での生活体験をするとともに、シカゴ建築財団で借りた建築物の解説が聞けるオーディオプレーヤーを片手に徒歩で観光した。中心地を歩いていると新しい建物ばかりではなく100年前に建てられた建物も多く残されていることがわかった。建設当時の社会情勢が反映され設計された新旧の建物が隣り合っ建てられていることは日本ではあまり見かけない光景なのではないかと思う。シカゴでは地震がな



オラクルアリーナ。バスケットボール等の会場として使用される、収容人数約3万人の体育館。

レイクショア・ドライブ・アパートメント。ミース・ファン・デル・ローエの作品。シカゴにはミースの作品が数多く存在する。



ジョン・ハンコック・センター。構造がデザインとなっており存在感がある。



ジョン・ハンコック・センターからの景色。シカゴが一望できる展望台。



く、風がかなり強いので、日本やサンフランシスコに比べて風に対する設計が重要視されているように思えた。

旅を終えて

同じアメリカでも実際に現地に行ってみると都市によって街や人の雰囲気が異なり、それぞれの都市にあった構造や環境があることを学ぶことができた。サンフランシスコでは開発が進み、シカゴでは古くからの建物を使用しており、この対照的な2都市を続けて見ることができたことは私にとってすごく刺激的で良い経験になった。また、現地のツアーや一般の方の部屋に宿泊することで、観光するだけではわからない、その都市の雰囲気も味わえたこともこの旅の収穫の一つであった。

NICHE PASSPORT

アメリカの空間構造と高層建築

伊藤 賢治



伊藤 賢治 Kenji Ito

1994 東京都生まれ
2013 東京都立小平南高等学校 卒業
工学院大学建築学部 入学
2017 工学院大学建築学部 卒業
工学院大学大学院工学研究科建築学専攻（山下（哲）研究室）在学中
将来の夢 もっと様々な国を訪れて、いろいろな建物を見て設計に活かしたい

アドルフ・ロースとベルリンの建築を求めて

谷口 翔太



渡航の目的

今回の渡航の目的は2つあった。1つ目は、卒業研究で研究対象としたアドルフ・ロースのウィーンとプラハにある建築を自分自身の肌で感じ体験すること。2つ目は歴史的に様式の幅が広く、現代まで世界中に大きな影響を与え続けているベルリンの名建築を学ぶことである。

この渡航ではモダニズムを切り開いたアドルフ・ロースを学ぶことだけに留まらず、ロースの批判対象となったドイツ工作連盟、そのドイツ工作連盟の影響を受けたバウハウスや近代建築の巨匠と称されるル・コルビジユやミース・ファン・デル・ローエの建築、ドイツ統一後を生き抜いたダニエル・リベスキンドの建築、そして現代建築とこれらを通史で巡ることになる。このことは歴史を深く理解しこれからの建築を考える上での基礎を築いてくれると考えた。

アドルフ・ロースの住宅建築を巡って

今回の渡航の最大の目的がアドルフ・ロースの設計した住宅を巡ることである。ウィーン郊外の住宅地に建つ5つとプラハの小高い丘の上に建つ1つの住宅を訪れた。彼は1908年に「装飾は犯罪である」と宣言しモダニズムの口火を切り、その提言を先駆的な住宅作品で実現させてきた。その住宅を古い順に見ていった。徐々に、デザインが洗練され外観はシンプルな立方体へと変わっていき、立面はシンメトリーの要素が強くなっていく様子があった。特に晩年の作品であるモラー邸とミュラー邸は外観だけでも本当に素晴らしい作品だと思った。卒業研究時は、内部空間に注目していたが、外観のデザインや敷地での建て方にも面白さがあるのでとは考えた。

アドルフ・ロースの晩年の最高傑作であるミュラー邸だけは、内部を見学することができた。立体的に無駄なく空間を使うことで、機能にあった様々なスケールの部屋を作っている。部屋を巡り建物の大きなス



ミュラー邸



アメリカン・バー

ケールから身近な身体スケールへと落とし込んでゆく事が体感でき、これまで気づかなかったロースの親密的な空間づくりを感じた。

全身で知覚する空間

ウィーン市内にあるアドルフ・ロースが設計したアメリカン・バーを訪れた。そこでは、彼のデザインの特徴である視覚を操り、触覚を大切にしていることが実感できた。鏡や大理石、様々な素材を使って小さな店内を豊かな空間へと仕上げており、入店した時から、通りの賑わいから離れた独特の落ち着いた雰囲気から飲まれてしまった。見上げると、格天井のすぐ下に鏡を貼り、格天井が無限に広がるように演出しており、狭さを感じなかった。また、薄暗い店内のため視覚的に空間を把握しづらいことも影響していると感じた。身体を包み込むソファや小さな家具、マホガニーを被覆した壁など、人の身体に触れる部分を大切にしている親密的な空間を作っていることがわかった。

新旧の建築が共存するベルリン

ヨーロッパの中心だったことや、東西2つの国に分かれていた歴史から、建築の幅が広い都市であった。そのため歴史的な建築と現代建築の共存の特有のあり方を見ることができた。

印象的に残っている建築は、ドイツ連邦議会議事堂とユダヤ博物館である。ド

イツ連邦議会議事堂では、ネオ・ルネサンス様式の国会議事堂にノーマン・フォスターが設計したガラスドームが乗せられている。古典的な建築を大切にしつつも民主政治の透明性を可視化し、ナチス時代とは違った新しい政治のあり方を実現したデザインだった。また、元高等裁判所だった建物とダニエル・リベスキンドが設計した建物の新旧2つからなるユダヤ博物館では、新旧の建物同士を外観から見えない地下の通路だけでつなげていた。新館への出入は、旧館からその通路を経由するしかない。ユダヤ博物館は、外観だけで新旧のつながりを直接的に表現したドイツ連邦議会議事堂とは違って、新館が周囲とは独立して建つことによって、迫害されたユダヤ人の心情や歴史を暗示的に表現しているデザインだとわかった。ベルリンに建つ建築の多くは歴史と土地に強く結びついている。古い歴史を消して忘れることなく、新たな未来へ繋げて行こうという設計者の意識を強く感じた。

旅を通して

私が興味を持ったアドルフ・ロース建築を存分に体験することができた。そこでは日本で図面や写真だけを眺めていることより多くのことを経験として教えてくれた。私が大切にしている「建築を自分の肌で感じる」が達成でき、気づいたことを今後の研究に役立てたい。



ドイツ連邦議会議事堂



谷口 翔太 Shota Taniguchi

1994 岡山県生まれ
2013 金光学園高等学校 卒業
工学院大学建築学部総合コース 入学
2017 工学院大学建築学部建築デザイン学科（富永研究室）卒業
工学院大学大学院工学研究科建築学専攻（富永研究室）入学
将来の夢 多くの人と関わり、常に学ぶことを忘れず成長しながら住宅の設計をしたい

モラー邸



オランダの国土開発とその使い方を学ぶ

山本 真央



32km続く締め切り大堤防の中間地点から
(左:アイセル湖、右:北海)



ロッテルダム駅前を走るトラムの線路に敷かれている芝



人の手で造られた国土

今回の渡航のきっかけは、現在研究している埼玉県低地部の洪水について、何か参考となるものはないかと模索している時にオランダに出会った。オランダは国土の4分の1が海面下であり、干拓地であることから、古くから洪水被害に悩まされてきた地である。しかし4つある都市の大半は、その干拓地に集中している。そのような地域に住み、働くことが可能なのはオランダ人の苦闘の結果であり、そこに掛けられた労力は計り知れない。

近年は地球温暖化による海面上昇や異常気象を受け、グレーインフラに頼るばかりではなく、環境共生を目指したグリーンインフラへの転換が先進的に行われている。私は古からのノウハウが詰まった実情を体感し、現在の研究に活かすことを渡航の目的としていた。そのため都市部のみならず、郊外部も歩き、人々の生活にインフラがどのように溶け込んでいるかを意識して旅をした。

街に織り込まれるグリーンインフラ

ロッテルダムの街では、グレーインフ

ラを彷彿させる近代的な開発に対し、トラムの線路に芝が敷かれるなどグリーンインフラが織り込まれている。最も印象的なものはクストハル美術館だ。オランダは国土を守る生命線として、至る所に堤防が存在する。その中には、現在堤防として機能していないものもある。クストハルは隣り合った堤防を上手く建築デザインの一部として組み込んでいる。このような建築によって、元々の地形であるかのような堤防こそ歴史的に繰り返した洪水への備えであることを再認識させられる。また歴史と融合し、新たなデザインの発信場となっていた。

水と共に豊かに暮らす

郊外部の住宅地は、水辺に隣接しているところが多い。自分の想像よりもはるかに水辺が多く、人々は自宅前にあるその水辺を思い思いに使っていた。また、ロッテルダムの郊外では緩やかな堤防で川と陸地を仕切っていた。そのような地域の堤防では、住人たちが思うまま工夫して、船乗り場を設置したり、草刈りをしている様子が伺えた。川岸には多くの

船がつけられていて、いつでも楽しめるようだった。またアムステルダム郊外にあるアイブルグ地区では、水辺に浮く集合住宅が存在する。水辺に接する階の住戸には船が寄せられていた。そのようなことから、オランダ人は水辺を風景として楽しむのか、アクティビティの一部とするのか。また、どのように水辺と関わって暮らしていくか、自身のライフスタイルに合わせて住む場所にこだわっているように見られた。

最後に

オランダの国土開発はインフラ機能を果たしながらも、目の前にある自然環境（グリーンインフラ）を享受している。そして、使い手が自身のライフスタイルに落とし込み、自由な形に変化させて共生していると感じた。

私はこの体験を修士論文の研究調査に活かすだけでなく、得られた視野の広がりや今後のあらゆる思考に活かしていきたい。



ウェストゼーデイク(堤防)に架かるクストハル美術館



住宅前の川岸に置かれる船

住宅街を流れる河川にて、カヌーを楽しむ人々



山本 真央 Mao Yamamoto

1993 埼玉県生まれ
 2012 西武台千葉高等学校 卒業
 工学院大学建築学部建築デザイン学科 入学
 2016 工学院大学建築学部建築デザイン学科（福永研究室）卒業
 工学院大学大学院工学研究科建築学専攻（篠沢研究室）入学
 2018 工学院大学大学院工学研究科建築学専攻（篠沢研究室）卒業
 大成有楽不動産株式会社 入社
 将来の夢 まちに貢献できるような設計をしていきたい

梓設計の構造を支える工学院大学卒業生

梓設計には工学院大学と大学院の卒業生が総勢561人中42人居る。内訳は意匠系21人、構造系5人、電気・設備系16人である。その中の構造系の4名、増子友介、本多栄一、宮坂大祐、塚田良仁が設計や監理に携わった中で、思い出に残っている物件と所感を報告する。



宮坂大祐 Taisuke Miyasaka

1967年生まれ
1992年3月 工学院大学建築学部建築学科卒業（宮澤研究室）
1992年4月 株式会社梓設計入社 現在に至る

「東京国際空港国際線旅客ターミナルビル」（2010年10月）初めての大きな空間建物で設計から監理まで通して担当した。羽田に国際線が戻ってきた注目物件で、外装や屋根にガラスが多く使われ構造的なデザインが求められた。この時現場で知り合った方々は一生の宝物だ。

卒業する時、宮澤健二先生に5年間は我慢して働きなさいと言われた。気が付けばあっという間の25年だった。最近では幅広い空港の設計だけでなく縦長の超高層住宅設計が多くなった。今迄の経験が通用せず苦労している。まだまだ吸収しなければならないことが多そうである。

東京国際空港国際線旅客ターミナルビル内観



東京国際空港国際線旅客ターミナルビル外観



増子友介 Yusuke Masuko

1953年生まれ
1971年4月 株式会社梓設計入社 現在に至る
1977年3月 工学院大学建築学部建築学科卒業（望月研究室）

「新潟駅南口第一地区再開発事業」（1985年4月）大規模商業施設（3棟、約60,000㎡）の構造設計及び逆打ち工法の工事監理。

「サンリオピューロランド（東京都多摩市）」（1990年9月）ディズニーランドに次ぐ大規模アトラクション施設の構造設計及び工事監理。大空間を分割してアトラクションの音響及び振動等に配慮した構造体の設計。

「豊橋駅ビル増改築新駅ビル」（1996年9月）日本初の新幹線橋上駅の構造設計及び工事監理。大井町駅ビルに次ぐ基礎梁の無い高層建築物の構造設計及び工事監理。

梓設計入社2年目に工学院大学工学部第2部に入学した。当時は若さにまかせ、職場と学校で得られる知識を貪欲に求めていた。設計物件は空港関連施設のほか、上記物件のように実例の少ない物件が多かった。これらは外部と協働で設計することが多く、建築設計が多種にわたる発想と技術の集積であることを知り、それらが技術の蓄積となった。設計以外に衝撃的な出来事は1995年の阪神・淡路大震災だった。被害を見て今後どのように設計すべきかと思い、被害調査報告書、耐震設計関連図書などを読みあさったことを覚えている。現在は、建築基準法が設計法を事細かに規定しているが、それに対して「設計の楽しさ」を忘れないようにすべきである。

新潟駅南口第一地区再開発事業



サンリオピューロランド





本多栄一 Eiichi Honda

1956 年生まれ
1979 年 3 月 工学院大学建築学部建築学科卒業（宮澤研究室）
1981 年 3 月 工学院大学大学院工学研究科建築学専攻卒業（望月研究室）
1981 年 4 月 株式会社梓設計入社 現在に至る

「新東京国際空港（現 成田国際空港）第 2 旅客ターミナルビル」（1992 年 3 月）日建設計と梓設計JV（ジョイントベンチャー）で行った。空港について全くと言っていいほど知識がなかった自分が、初めて空港旅客ターミナルビルの設計に関わったプロジェクトである。その後の多くの空港関係の仕事に携わるきっかけになった。建物規模もスケールもとてつもなく大きく、実施設計時には昼夜・曜日を問わずがむしゃらに取り組んだこと、自社以外の多くの人が同じ室に一堂に会し、意匠・構造・電気・機械他のスタッフが共通の目的に向かって共同作業を行ったことなどが、その後の構造設計に対する基礎となったと思っている。

設計や現場監理が楽しかった時期も苦しかった時期もあり、特に精神的には山あり谷ありだった。ただ、建物の規模や種類に関わらず、自分が携わった建物が社会に実存し多くの人に利用されていることに喜びとやりがいを感じる。



成田国際空港第 2 旅客ターミナルビル内観



成田国際空港第 2 旅客ターミナルビル外観



成田国際空港第 2 旅客ターミナルビル外観



塚田良仁 Yoshihiko Tsukada

1958 年生まれ
1980 年 3 月 工学院大学建築学部建築学科卒業（宮澤研究室）
1982 年 3 月 工学院大学大学院工学研究科建築学専攻卒業（望月研究室）
1982 年 4 月 株式会社梓設計入社 現在に至る

「全日空 成田第 1 号格納庫」（1988 年 7 月）基本計画、基本設計時に坪井善勝研究室に約半年出向し、研究室の中田捷夫先生の下で架構形式の選定を行った。実施設計は日建設計とのJV。

「全日空 東京新第 1 号格納庫」（1993 年 7 月）間口230mの無柱空間を実現。設計責任者として基本計画、基本設計、実施設計、現場監理をまとめた。現場で間口230mの大屋根を無事ジャッキダウンした時は男泣きした。

「東京新第 2 号格納庫」（2007 年 2 月）「東京国際空港国際線旅客ターミナルビル」（2010 年 10 月）、「石垣空港旅客ターミナルビル」（2013 年 2 月）、「那覇空港国際線旅客ターミナルビル」（2014 年 1 月）他全国のターミナルビルや空港施設。

「越後妻有文化ホール・十日町市民公民館」（2017 年 11 月）十日町は私と宮澤健二名誉教授の故郷だ。亡父が創設した地元の塚田設計事務所と梓設計とでJVを組み越後妻有文化ホールのプロポーザルに当選した。故郷に錦を飾った作品。

入社35年のうち、後半の10数年は当社羽田設計室で国内外の空港関係施設の設計に携わっている。唯一の例外が越後妻有文化ホール。格納庫設計は計画案件も含めると延べ20棟以上にもなり自称・他称とも格納庫の神と言われている。旅客ターミナルビル設計も延べ10棟以上の経験を持つ。最近、梓設計は所帯も大きくなり部下達は自分の子供より若い、一緒に楽しく設計をしている。是非、工学院大学からの構造系の若者の入社を希望する。

越後妻有文化ホール・十日町市民公民館内観



東京新第 1 号格納庫



越後妻有文化ホール・十日町市民公民館外観



東京新第 2 号格納庫



望月大介 研究室 40代卒業生 たちの現在

浦 俊弥



「昨年の9月に10年ぶりに望月研究室OB会が開かれました。各地から60余名が参集いただきました。中には25年ぶりに再会の卒業生など、ドラマティックなパーティでありました。

皆さんが建築デザインを学び、その時間と共にそれぞれの立場で個性豊かな花を咲かせてくれました。これは教師冥利に尽きるものです。本当に嬉しく思います。皆さんの今後の活躍に期待します」

望月大介

望月大介先生が工学院大学を退官してから、昨年で10年の節目となり、先生ご自身も喜寿という大きな節目を迎えられた。1978年から2007年まで在籍した研究室OBが日本全国から集い、2017年9月にお祝いの会を催した。

岩月美穂さんの2016年JIA新人賞と建築学会作品選集新人賞のダブル受賞の知らせを始め、40代になり若手建築家として足跡を残し始めた1992年から2001年に在籍した同窓生の活躍する話題や各賞入選の報告がお祝いの席に集まった。

私を含むこの世代は、卒業後にリーマンショックによる経済不況や東日本大震災等、多くの社会不安に晒されるなか今日まで設計活動を続けてきた。そのような時代であるからこそ、「敷地の特徴を読み解き、美しいプロポーションと共に豊かな平面・立体構成・魅力的な外観を

つくること」というご自身の設計思想からなる、人の気持ちを豊かにする建築を、先生が「艶っぽいだろう？」という独特の表現で伝えてくれたことを何時も思い出す。ここに掲載した作品はそれぞれ異なる佇まいをしているが、この「艶っぽさ」を各卒業生が思い思いの方法で思い描き、建築の力によって敷地の風景や利用する人々を生き活きと元気にさせた様子が目に浮かぶ。

成長期を終えた日本は、人口減少・超高齢化の成熟期へと舵を切り、建築に求められる役割もますます多様化しつつあると思われる。多くの卒業生たちが先生の教えを胸に抱きながら、それぞれの立場、様々なかたちで多くの場所と人に「艶っぽさ」を与え続け、社会を豊かにしてくれることと思う。これからも望月大介研究室の交流を通じて、多いに刺激し合う良き繋がりであり続けたい。

2017年9月京王プラザホテル新宿にて望月大介先生の喜寿祝賀会
望月大介先生と千賀子夫人を研究室の卒業生が囲んだ。市川賢司、秋山覚、鶴見一夫、水野哲雄、出井敏雄、高橋徹、吉原雄一、遠藤義則、真田智昭、志村芳彦、杉本圭、加藤信頭、三沢守、菊地明久、加藤博美、朝日智子、菊島淳二、木村秀幸、小林光義、高田恵里、寶田晶子、橋本しのぶ、松葉幸光、浦島則之、鈴木崇益、須永幸弘、立澤園子、近國祐子、荒川公恵、大塚篤、宮本圭、岡宏、新井真一郎、小倉利公、藤岡崇、小島光晴、鈴木重善、佐々木将光、大成社、相原仁史、田野上哲広、白蘭、浦俊弥、地田正和、平野太基、松下慎太郎、岩月美穂、鈴木崇志、福島さやか、鈴木淳子、片岡照博、庭本卓実、大和篤史



伊藤 潤一 (1996年卒業、千葉大学 / 伊藤潤一建築都市設計事務所)
「東小松川デイサービス」
2016年JIA優秀建築選2016 2016年江戸川景観まちづくり賞2016
2016年JCDデザインアワード金賞、面出薫賞 2017年JIA第8回建築コンクール佳作
2016年グッドデザイン賞2016



小島 光晴 (1996年卒業、小島光晴建築設計事務所) 写真：中村絵
「うちのうち」
2017年第45回日本建築士会連合会賞



佐々木 将光 (1997年卒業、上野藤井建築研究所)
「鹿児島大学学習交流プラザ」
2016年JIA優秀建築選2016
2017年日本建築学会作品選集



浦 俊弥 (1999年卒業、株式会社日建設計)
「所沢聖地霊園管理事務所」
2014年SDレビュー2014入選
2016年JIA優秀建築選2016
2016年グッドデザイン賞2016



岩月 美穂 (2000年卒業、studio velocity 一級建築士事務所)
(2000年卒業 栗原健太郎と共同主宰)
「愛知産業大学言語・情報共育センター」
2016年JIA新人賞2016 2015年グッドデザイン賞2015
2016年日本建築学会作品選集新人賞 2015年日事連建築賞奨励賞
2015年第9回愛知県建築士事務所協会建築賞優秀賞 2015年第47回中部建築賞



松下 慎太郎 (2000年卒業、一級建築士事務所タスエス)
鈴木 崇志 (2001年卒業、一級建築士事務所タスエス)
「Billboard」
2015年第34回三重県建築賞入選 2015年2A ASIA ARCHITECTURE AWARD 2等
2015年DSA日本空間デザイン賞優秀賞 2015年Taipei International Design Award優選

白樺湖 夏の家

2017、そして2018に向けて

白樺湖夏の家は故武藤章先生が設計した工学院大学白樺湖学寮を工学院大学建築系同窓会が保存、活用するために引き継いだ施設である。2015年に武藤先生設計の工学院大学八王子図書館が解体され、翌2016年に白樺湖学寮の閉鎖・解体も決定されたことを受け、校友会および建築系同窓会の有志が立ち上がり、せめて学寮だけでもとの想いで解体を阻止し、保存活用に道筋をつけた。

2017年の主な活動としては、北欧に造形の深い講師を迎えて講演会を2回開催した。また9月17日には「故武藤章先生 33 回忌の集い」をこの場所で執り行い、この建築を残す意義を再確認する機会となった。さらに、建築の外構の整備にとりかかるため、その設計を故波多江健郎先生の御子息である波多江宏氏にお願いした。まずは2018年5月に白樺の植樹からはじめる予定である。

2017年にご寄付をいただいた会員を中心に試験的に活動してきたが、2018年からはより広く校友、同窓そして在学生を交えて活動を広げてゆく。みなさまのますますのご支援をお願いしたい。

白樺湖 夏の家
工学院大学旧白樺湖学寮

■基本情報

施設名：白樺湖夏の家／工学院大学旧白樺湖学寮

所在地：長野県茅野市北山29

主要用途：フィンランドの巨匠アルヴァ・アールトに学んだ唯一の日本人建築家で工学院大学教授であった武藤章先生（1931-1985）が設計した建築の動体保存を目的に、主に北欧の建築とデザインに関する講演会やワークショップ等に活用する。「白樺湖夏の家」を拠点に、北欧の暮らしに啓発活動を通じ、白樺湖の活性化に貢献したい。

「建築を保存する会」

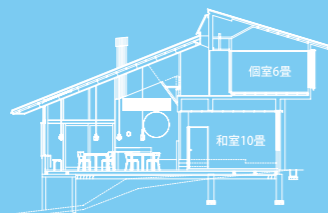
本建築を保存する活動を支援し、維持管理に協力する校友の会。入会時寄付金は300,000円、維持協力金は12,000円／年。現在の会員数は20名。入会金は改修工事費等の原資となった。会員には「白樺湖夏の家」の鍵が与えられ、まるで自分の別荘のように利用することができる。会員は広く校友と教職員から募集する。会員の同伴を条件に、だれでもいつでも夏の家を利用することができる。教員が入会し研究室のゼミ活動等で有効活用することを期待している。利用スケジュールは「建築を保存する会」が管理する。

会員募集中！

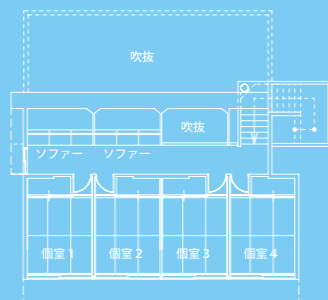
「建築の保存を支援する企業の会」

本建築を保存する活動を支援し、維持管理に協力する企業の会。入会時寄付金は500,000円、維持協力金は120,000円／年。建築の保存をサポートする企業として建築系同窓会が表彰する。企業会員は本建築を企業研修、企業主催のイベントに利用できる。本学学生を対象とするイベントについては、建築系同窓会が全面的に支援する。

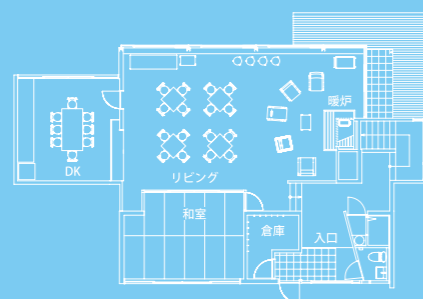
企業会員募集中！



断面図



2階平面図



1階平面図



歳時記 2017

白樺湖 夏の家

白樺湖夏の家の2017年は、5月1日の上下水道の通水と大掃除から始まった。鈴木研究室を総動員しての開館準備の時間は格好の教育の場でもある。7月15日、「第1回北欧建築デザインの集い」として北欧家具に造形の深い山口太郎氏にご講演いただいた。7月22日には、6大学合同ゼミを実施し、定員20名のところ、総勢42名が寝食を共にした。8月9日、OBの河野氏より鹿の親子の目撃情報。9月17日、故武藤章先生の奥様敦子さんとご息女の武藤かおりさんが33回忌の集いを企画され、多く卒業生が集った。9月30日、「第2回北欧建築デザインの集い」としてアールト研究で名高い平山達先生にご講演いただいた。そして10月31日、水抜きを完全に行い冬支度。白樺湖夏の家2017年の活動を終えた。

7/22-23

6 大学合同ゼミ合宿

参加大学：関東学院大学・工学院大学・首都大学東京・湘南工科大学・前橋工科大学・早稲田大学
参加人数：48名
合宿のテーマは「白樺湖を救え！～リゾートとして低迷している白樺湖の再開発～」42名の学生を4グループに分けて4つの提案をまとめた。今後、白樺湖の行政サイドに提案していきたい。



9/17

武藤章先生、33回忌の集い

武藤章先生の33回忌の会を武藤先生の設計したこの建築で開くことができました。当日は台風の最中、50数名の方々が集まり、故人の設計した空間の中で故人を偲び、思い出話に花を咲かせた。冬季は閉鎖して夏季のみ公開するかたちで、白樺湖学寮を残すことができたことに喜びを噛みしめた。



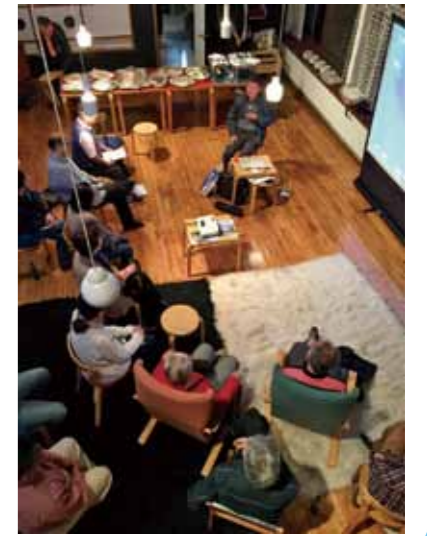
9/30

白樺湖夏の家／第2回北欧建築デザインの集い (フィンランド 独立100周年記念講演会)

日時：2017年9月30日(土)、18:00～20:00
テーマ：「アールト設計の図書館から読み取れる事」
講師：平山達氏(多摩美術大学名誉教授、北欧建築・デザイン協会理事)
<http://hokuouzemi.exblog.jp/>
主催：工学院大学建築系同窓会／建築を保存する会

第2回の講師は、アルヴァー・アールト研究の第一人者である平山達先生。プロジェクトから次々と貴重な建築写真が映し出され、親密な雰囲気の中

でアールトの図書館について知識を深めることが出来た。



2017 5 May

5/1

開館、通水、大掃除

鈴木研メンバー総出で開館支度。



2017 6 June

7/15

白樺湖夏の家／第1回北欧建築デザインの集い (フィンランド 独立100周年記念講演会)

日時：2017年7月15日(土)、18:00～20:00
テーマ：白樺湖夏の家の家具について
講師：山口太郎氏(北欧家具taloオーナー) <http://www.talo.tv/>
主催：工学院大学建築系同窓会／建築を保存する会

白樺湖夏の家1950年代、60年代のアルヴァ・アールトの家具は、毎月一度フィンランドに買い付けに通っている山口太郎さんにそろえていただいた。暖炉を囲んでお酒を飲みながらアールトのビンテージ家具についてご講演い

ただき、買い付けで養われた審美眼と査定の奥深さに一同驚愕した。



2017 7 July

2017 8 August

8/9-11

河野工氏から残暑お見舞いと鹿の目撃情報

「残暑お見舞い申し上げます。8月9日から11日まで白樺湖夏の家滞りました。東京が猛暑の時、TVもインターネットもないところで過ごすのは、年金生活者には心地いいもので

た。快適な白樺湖ライフでした。ありがとうございます。追伸、白樺湖夏の家で野生の鹿の母子と出会いました。定年になって、南伊豆で農業を始めた友が鹿で悩まされていると、言っていました。鹿の出没は嬉しいが、野生の熊に遭遇しないことを祈っている。



2017 9 September

2017 10 October

10/31

水抜き、閉館

白樺湖の冬は厳しい。11月には道路が凍結しはじめ、真冬にはマイナス20度にもなる。水抜き作業を完璧に行うため地元の花岡設備工業に依頼し、閉館した。



2018年は5月3日開館！

活動報告 2017

白樺湖 夏の家

第1回と第2回の「北欧建築デザインの集い」については鈴木研究室修士2年の浅水雄紀君から、「6大学合同ゼミ」については4年の野片智之君から報告する。そして「故武藤章先生 33 回忌の集い」については武藤かおりさんからの報告が届いた。

第2回北欧建築デザインの集いでは、講演後にスウェーデン料理に舌鼓を打った。付近のレストラン「北欧料理ガムラスタン」の北原シェフが腕によりをかけて届けて料理を届けてくれた。写真手前から、卵ニシン、イペリコ豚のサラミやハンガリーのハムの盛合せ、ローストビーフサラダ、スモークステーキ(ケーキ型のサンドウィッチ)、スウェーデンミートボール、ノルウェー産ニシンのディルマリネ、マスタードソース、ノルウェー産サーモンの燻製、プリンセステーキ(プリンセスのケーキという名の、スウェーデンでお祝いの時によく食べられるケーキ)、サーモンフィッシング、ヤンソンズ・フレステルセ(ヤンソンズさんの誘惑という名の、ポテトとアソチョビのグラタン)でした。



1 第1回北欧建築デザインの集い

2017年7月15日

白樺湖夏の家がオープンし、フィンランド独立100周年を記念する最初の「北欧建築デザインの集い」が、工学院大学建築系同窓会/建築を保存する会の主催により開催された。

7月中旬の白樺湖はとても涼しく過ごしやすい。会場設営は鈴木研究室の学生達が行い、北欧家具taloの代表である山口太郎氏に『白樺湖夏の家』について講演して頂いた。同氏は20代に輸入業を志しアメリカへ行き、26歳よりフィンランドから北欧家具の輸入販売を開始。現在では年に10回ほどフィンランドやデンマーク、スウェーデンで買い付けを行い、輸入のコンサルティングも行っている。白樺湖夏の家に加え、1950年代、60年代のアルヴァ・アールトのビンテージ家具について、解説していただいた。

次に、工学院大学名誉教授である波多江建朗先生のご子息、波多江宏氏が白樺湖夏の家をランドスケープデザインの発表を行った。ペンシルベニア大学で学びアメリカで実務経験を積んだ本格派である同氏に、白樺と北欧の植栽に特化したご提案を伺った。

講演後は学生が作った料理と参加者から持ち寄った美味しい食事を囲み、懇親会を行った。時には熱く議論が飛び交い賑やかであったり、時にはアームチェア401に腰かけ暖炉を囲みお酒のグラスを傾けたりした。会員にとっても学生にとっても北欧の暮らしとデザインを体験し学べる貴重な場であった。(浅水雄紀)

テーブルの瑠璃色の陶器は、波多江健郎研究室OBでTAC演田建築設計事務所代表の演田昭夫氏の作陶である。ヤマメのパーマーク柄のお皿大1枚、小20枚、ブルゴーニュ型のワイン呑み20個を白樺湖夏の家にご寄贈いただいた。



ブルゴーニュ型のワイン呑み



ヤマメのパーマーク柄皿

2 第2回北欧建築デザインの集い

2017年9月30日

気持ちのいい秋晴れの中、第2回北欧建築デザインの集いが開催された。9月末の白樺湖の空気は澄んでいて少し肌寒い。会場設営は前回と同様に、鈴木研究室の学生達が行った。また、波多江宏氏が設計したランドスケープデザインの外構計画に基づいて、同氏の指示のもと木くいと糸張り作業を行った。学生達にとっては座学を超えた貴重な経験の場となった。

陽が沈み、パチパチと音を立て暖炉が室内を温める中、平山達先生による「アールト設計の図書館から読み取れる事」の講演が始まった。多摩美術大学名誉教授にして北欧建築デザイン協会理事である同氏は建築ガイドブック『アルヴァ・アールト』の翻訳者であり、ウェブサイト『北欧建築ゼミアールト』においてアールトの建築写真1800枚を公開している超のつくアールトマニアである。

「実はアールトには全く興味がなかった。40代後半に初めてアールトを見に行った時に、コルビュジエとは違う建築の考え方があると。鳥肌がたつ」と平山先生は語る。アールトの生い立ちから北欧の近代建築の話も交えながら、アールトが図書館に対し何を考えて作ったのかを分かりやすくお話頂きとても素晴らしい講演であった。今回は鈴木研究室の3年生が加わり、初めて白樺湖夏の家を体験した。普段から北欧の暮らしについて研究室のゼミで学んでいた学生達は、食い入るように聴講していた。講演後は北欧料理のガムラスタンのケータリングによる豪華な料理とお酒を楽しんだ。夜が更けるまで暖炉を囲み語り合い、大変贅沢な空間であった。(浅水雄紀)



3 6大学合同ゼミ2017

2017年7月22日、23日

毎年恒例の合同ゼミ合宿を2日間初夏に開催した。今年度の参加校は、関東学院大学、工学院大学、首都大学東京、湘南工科大学、前橋工科大学、早稲田大学と過去最大の6大学が参加し、48名の有志が集った。開催地は工学院大学学寮の1つ、白樺湖夏の家である。この合宿では公共的なテーマに基づき、即日コンペティションを行った。

今回のテーマは合宿地に因んで、「白樺湖を救え!〜リゾートとして低迷している白樺湖の再開発〜」である。42名の学生を4グループに分け、「空き家」「白樺の森」「アクティビティ」「フォトツアー」とそれぞれキーワードを掲げて課題に取り組んだ。建築的、ランドスケープ的視点に留まらず、ソフト面についても徹夜で議論を深めていった。各大学でそれぞれの専門分野を学ぶ学生が、1つのテーマについて議論し普段は知れない意見に触れることで、見識を深めることができ大変有意義な合宿になったと思う。(野片智之)



4 武藤章先生 33回忌の集い

2017年9月17日

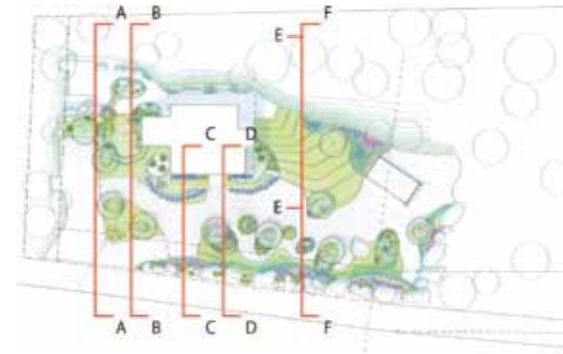
台風がまさに日本列島を席卷しようとしていた秋の午後、白樺湖夏の家で「武藤章33回忌の集い」を執り行わせていただきました。悪天候にも関わらず、50数名の方々にご出席いただき、故人の設計した空間の中で故人を偲び、北欧料理をいただきながら思い出話を花を咲かせました。卒業生の方が持ってきてくださった生前の授業の音声データ、八王子図書館の職員の方がお作りになった取り壊された図書館をテーマにした曲、南迫哲也先生、谷口宗彦先生、卒業生の方々のスピーチなどを拝聴し、瞬く間に時間が過ぎて行きました。また工学院大学琴科クラブのご協力のもと琴科山荘の見学をすることもできました。リビングの壁面の円形の凹部に自宅から持ち込んだ遺影が、まるでそのためにデザインしたかのようにピッタリとはまりました。その光景を目にし、取り壊されるという憂き目にあいそうだった白樺湖学寮が、鈴木敏彦先生をはじめとする建築を保存する会の方々によって滅滅という形で再生され、このように利用させていただけたことに深い感慨をおぼえました。(武藤かおり)



白樺湖 夏の家

外構整備計画案 2018

蓼科山から白樺湖に向かって流れる風により木々と笹の作り出す音、湿った野草の緑の香りに感動した。また光の当たり具合は 24 時間様々な表情をサイトに与える。東側の岩棚は道路を介して、山からの風や土の変動を力強く押さえている様に感じた。実際、サイトに一つだけ大きな岩がある。光は半日陰から木漏れ日程度だが、光が岩に作る影は美しい。建物の北側と西側は白樺湖に向かって下りの斜面となるため時間によっては日向から西日が強い。昨年お話を戴いたとき、フィンランドの様にしてほしいとの事で、なるべく多様な北欧の植物を所々に配した。そして岩と植物の作り出す光と影、木々の香りを間近で感じられるようなデザインを心がけた。



section



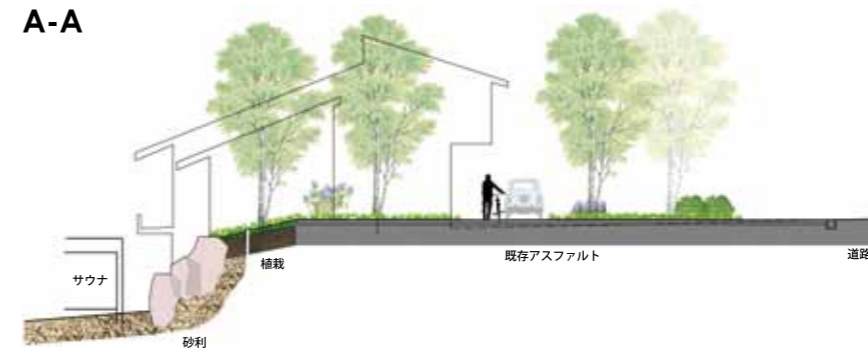
diagram



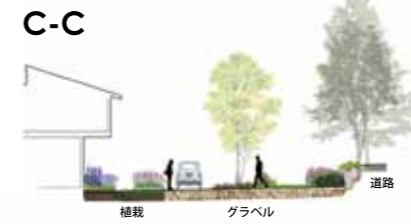
GC(グラウンドカバー): クラピア, リシマキア, タンポポ
 低木: ブッドレア, ハイドラングシア
 高木: シラカバ

siteplan

A-A



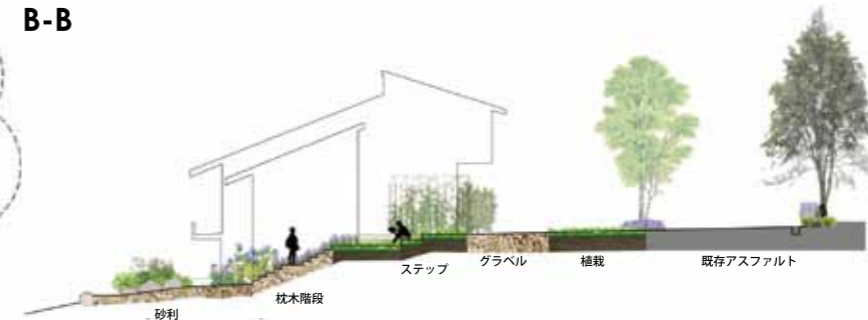
C-C



D-D



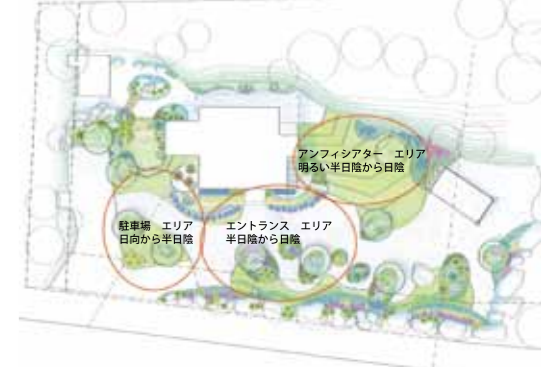
B-B



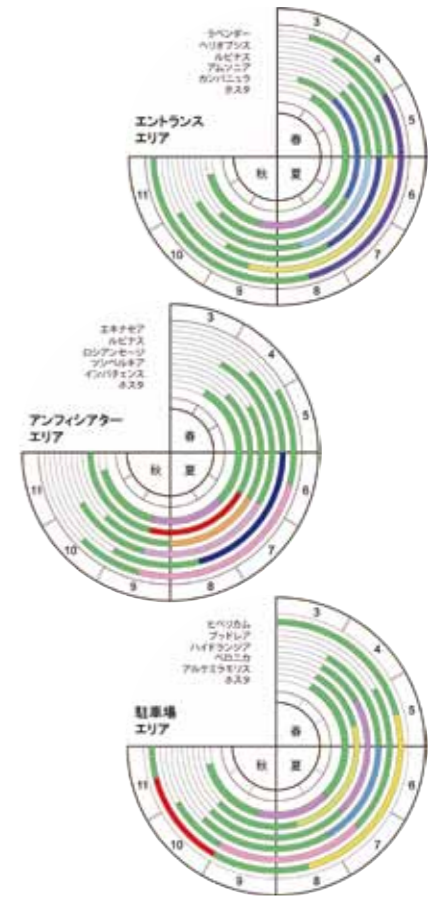
E-E



F-F



schedule-key



波多江 宏 Hiroshi Hatae

東京生まれの東京育ち 54歳 趣味は庭仕事とBMX
 幼い頃から亡き父にカーンやライト、コルビジェの建築ツアアに連れられ、何となく、建築デザインの道に進む。武蔵工大建築学科卒業後、坂倉事務所勤務、その後、亡き父(波多江建朗)の江東区のプロジェク等への興味からランドスケープデザイナーをめざし渡米。ペンシルバニア大学大学院デザイン学科ランドスケープデザイン科卒業後、米国東部にランドスケープデザインの実務を約10年積む。現在、家業の不動産管理会社の社長兼デザイナーとしてこなす一方、ペンシルバニア大学の友人達とコンペ等を通して世界にもっと緑を増やしていこうと考えている。

「白樺湖 夏の家」 会員規約

1 名称

本会の名称は、「白樺湖 夏の家」とする。

2 目的

(1) 故武藤章設計の建築を長く維持・監理し、武藤章の北欧建築・デザインの精神に学ぶ。
(2) 白樺湖夏の家を拠点に白樺湖のまわりのづくりに参画し、北欧の暮らしに学ぶ環境づくりに貢献する。

3 事業

本会は、前条の目的を達成するために次の事業を行う。

(1) 故武藤章設計の工学院大学白樺湖学寮を学園から引き継ぎ、工学院大学建築学系同窓会が会員制施設として維持、運営する。

(2) 前号に附帯する一切の事業施設利用に関する規約は別に定める。本会の事業年度は4月1日より3月31日までとする。

4 会員資格

「建築を保存する会（正会員）」は、工学院大学校友会会員および工学院大学教職員であること。

5 会員の種類と会費

本会は、本会の目的、事業内容に賛同した「建築を保存する会（正会員）」および「建築の保存を支援する企業の会（企業会員）」から成る。

- (1) 「建築を保存する会（正会員）」
- ・入会時寄付金：300,000円、維持監理協力費：12,000円/年
 - ・施設利用料：無料、同伴者：無料
- (2) 「建築の保存を支援する企業の会（企業会員）」
- ・入会時寄付金：500,000円、維持監理協力費：120,000円/年
 - ・施設利用料：無料、同伴者：無料

6 入会方法

- ・入会申込書の提出。
- ・役員による入会審査および承認。

7 施設使用原則（使用方法の詳細は、<http://niche-alumni.com/> に定める）

- ・会員は夏の家を自分の別荘だと思って大事に使用すると同時に、会員同士が快適に過ごせるように考えて行動する。
- ・夏を家の鍵は、自己責任のもと会員各自が保持する。
- ・事前に予約の上、会員自ら解錠して使用する。
- ・次に使用する会員のために自ら清掃して、持ち込んだモノは一切残さず、会員が消灯・施錠して帰ること。

8 役員

本会の役員として代表1名、副代表1名を置く。

- (1) 代表は建築学系同窓会会長とする。副代表は建築学系同窓会副会長とする。
(2) 代表は本会の業務の全てを管理する。但し、代表が必要と認めた場合、他の会員に一部業務を代行させることができる。

9 任期

代表の任期は、工学院大学建築学系同窓会会長、副会長の任期とする。

10 財源

本会の事業に要する資金は、正会員、企業会員の入会時寄付金、維持監理協力費、および寄付金をこれに充てる。

11 会計

本会の会計は工学院大学建築学系同窓会の事業として計上されるものとする。本会の会計年度は4月1日より3月31日までとする。

12 届出事項の変更

会員は、入会申込所にある氏名、住所等に変更が生じた場合は、ただちに代表に届け出る事とする。

13 退会

代表への退会届けの提出をもって退会とする。
会員の退会は何人も是を妨げてはならない。

14 解散

本会の解散については、正会員と企業会員の合議による。
本会の解散にともなう残余財産の清算については建築系同窓会に移管する。

15 会員間の連絡

会員間の連絡はEメール、電話等で行う。

16 所在地

本会の所在地を下記の通りとする。
工学院大学 新宿校舎 26階 鈴木敏彦研究室
〒163-8677 東京都新宿区西新宿1-2-4-2に置く。

17 公告の方法

当会の公告は、<http://niche-alumni.com/>にて電子公告で行う。

18 設立日

本会の設立日は、平成28年4月1日とする。

本規約は、平成28年4月1日より発効とする。

この規約の記載内容について事実と相違ないことを証明する。

工学院大学 新宿校舎 26階 鈴木敏彦研究室
〒163-8677 東京都新宿区西新宿1-2-4-2
代表 工学院大学建築学系同窓会会長 鈴木敏彦

<建築学系同窓会振込先>
みずほ銀行 新宿西口支店
普通口座 1029061
名義：工学院大学建築系同窓会 会長 鈴木敏彦

MUTOH

Creation, we make it happen...

MUTOHなら安心です。

あらゆる設計現場で、高い信頼性と納入実績を誇るMUTOHの設計製図ツールは、教育の現場でも活躍してくれます。

アイデアをかたちに!



3Dプリンタ出力サービス

模型や試作、治具など様々な用途にご利用いただけます。

- 3Dプリンタを購入するまでではない
- 使用頻度が高くない
- 3Dプリンタの品質を比較したい

LINER BOARD UM-06N7

国産

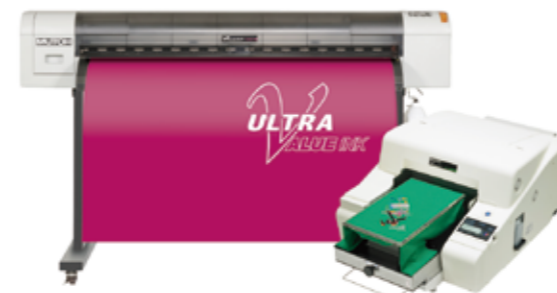
建築士
受験用



最大適応製図用紙サイズ：A2
製図板サイズ：A2 (451×604mm)
ゆとりの製図範囲と高精度・高操作性のコンパクトな軽量型平行定規。

精度は、設計製図機械「ドラフター」譲りで万全です。随所に、図面を汚さない「スケールフローティング機構」や厚紙にも対応可能な「ダブルヒンジ機構」など、基本性能にも妥協を許さない親切設計。

MUTOHならではのノウハウを凝縮したA2サイズ平行定規です。



インクジェットプリンタ

大判印刷から、立体物へのUV印刷など多種多様。

- 大きいポスター、壁紙を印刷したい
- 模型など立体物に印刷したい
- バッグなどオリジナルグッズを製作したい

武藤工業株式会社

東京都世田谷区池尻3-1-3 〒154-8560 TEL(03)6758-7130 FAX(03)6758-7139

<http://www.mutoh.co.jp/>



建築、都市、人の融合

人を取り巻く環境として

私たちは、建築とは、社会のニーズを把握し、それに的確に応えようと共に、環境としての建築が人と社会に与える影響を歴史時の流れの中でいかに正当に作用していくかを見極めることが大切だと考えます。すなわち、真に求められる建築、価値ある建築を具現化していくことこそアーキテクトの使命であると考えています。そして、単一の建物を個々に考えるのではなく、都市全体を総合的な見地から捉え「建築、都市、人の融合」を基本理念としたヒューマンアーキテクチャーを心がけています。



フジタと描く、未来のカタチ。

私たちフジタは、お客様や社会が思い描いている未来を想像し、その実現に向かって、共にカタチにしていきます。土木・建築の枠を超えて、まちづくりをサポートし、そこに暮らす人々にとって本当に価値あるものを創り続けることが私たちの使命だと考えます。大和ハウスグループの一員として、広い視野を持ち、グローバルに展開してきたフジタ。たゆまず進む私たちに、どうぞご期待ください。

伝統と創造

明倫建設

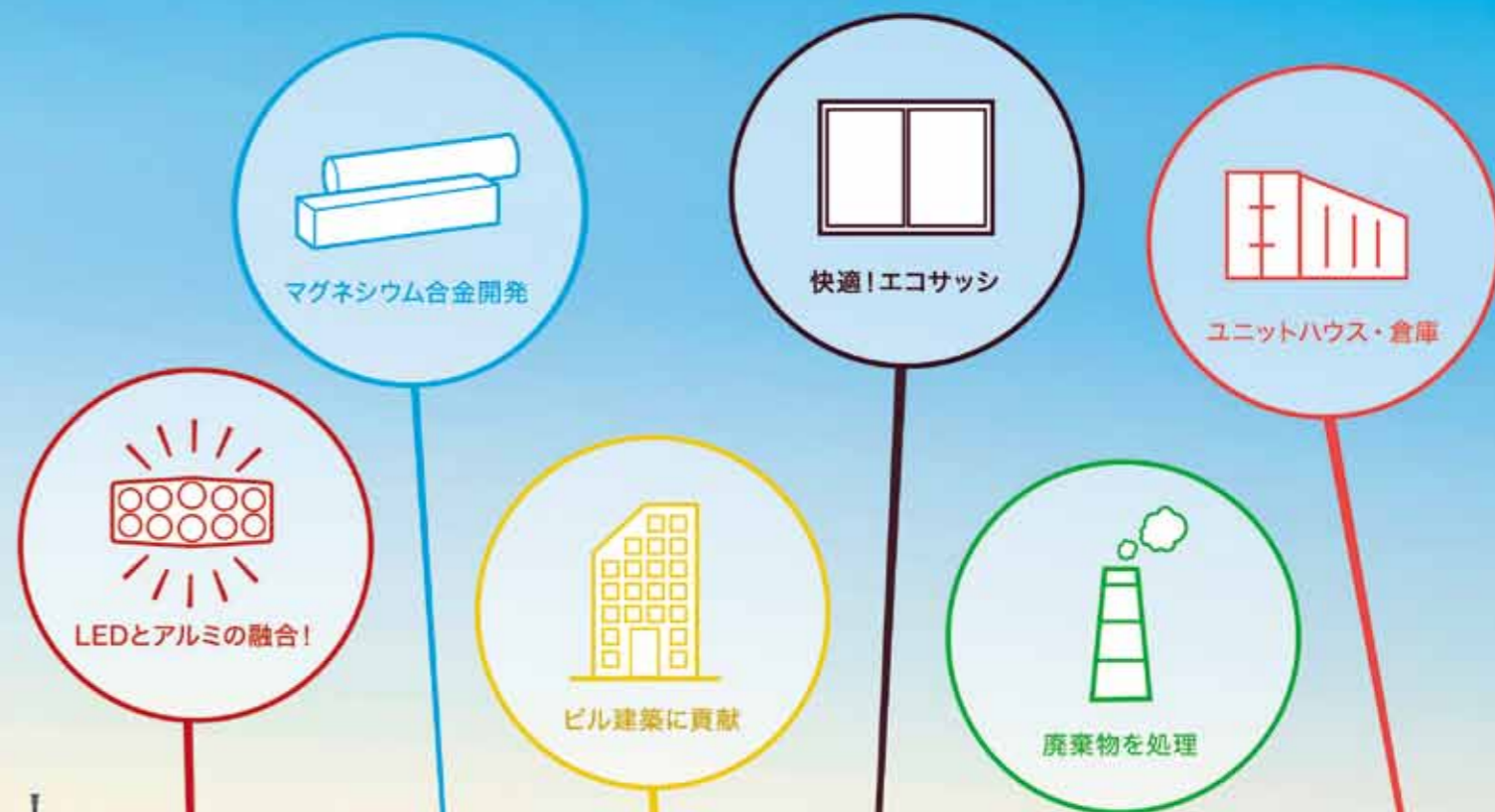


〒169-0072
東京都新宿区大久保1丁目17番14号
TEL 03-5285-5816
FAX 03-5285-5818

業務内容

- 建築内外リフォーム工事・設計・長期修繕計画
- 各種建築物・工作物の解体工事一式請負・施工
- 建築物の移築・曳家及社寺建築・文化財建築の修復・復元工事
- 建築物の内外装工事の請負・施工
- 建築物に付随する各種設備機器の販売及び取付け工事の請負・施工

あなたのそばに、いつも。



窓から夢をひろげていきます
不二サッシ

www.fujisash.co.jp

わたしたちは、
構造計算適合性判定業界の
リーディングカンパニーとして
社会に貢献しています。

取締役会長 田野邊 幸裕 (昭和44年卒)
代表取締役社長 鈴木 宏夫 (昭和44年卒)
顧問 平野 久雄 (昭和41年卒)
監査役 谷口 宗彦 (昭和44年卒)

構造に興味のある方一緒に働きませんか？

構造計算適合性判定員と補助員を募集しております。
03-6413-5771 (管理部) までご連絡ください。

指定構造計算適合性判定機関 / 登録建築物エネルギー消費性能判定機関
株式会社 **建築構造センター**

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-8-1 大橋御苑駅ビル6階 TEL: 03-6413-5777

40年を超える経験が
安定した合格実績をつくります。

1級建築士 学科 本科コース 基準達成合格実績

合格率

2013~2017年の平均

基準 本講義出席率 7割
宿題提出率 7割
公開模試試験② 90点/125問

87.8%

※上記合格率は、直近5年間(2013年~2017年)の1級建築士学科コース在籍者より、本講義出席率7割以上、宿題提出率7割以上、公開模試試験②90点/125問以上を満たした方の平均合格率です。模擬試験のみの受講生や教材購入者、無料の役務提供者は含まれておりません。

※基準達成者 957名 / 合格者合計 841名



私も
日建で頑張りました！

1級建築士 累計合格占有率

No.1

結

努力を結果に結びつける

1987~2016年 合格者累計
日建学院 1級建築士 96,701人
全国累計 1級建築士 164,244人

当学院
合格者の
1級建築士
占有率 **58.9%** 直近
30年間の
累計実績!

我が国の1級建築士の半分以上が日建学院出身者です。

2級建築士 171,282人 *1980~2016年累計
宅地建物取引士 99,273人 *1980~2016年累計

日建学院コールセンター  0120-243-229

株式会社建築資料研究社 東京都豊島区池袋2-50-1 受付/AM10:00~PM5:00(土・日・祝日は除きます)